

---

# マテリアルゴーストの一存

オルメス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マテリアルゴーストの一存

### 【Nコード】

N2966N

### 【作者名】

オルメス

### 【あらすじ】

この物語は、水月鏡花の碧陽学園ライフを淡々と綴ったものです。過度な期待はしないでください。

マテリアルゴーストと生徒会の一存のクロス作品です。マテゴ最終巻の最後の場面を汚されたくない人は回れ右をしてください。また、鏡花の性格、趣向、そして<企業>、というか二つの作品全体に盛大な自己解釈が含まれています。ご注意ください。

作者の受験勉強の合間に書かれています。そのため不定期更新となります。受験も無事終了しました。そのため更新頻度は早くなりそうです。

## ぶるるーぐ

本日より、私、水月鏡花みつききょうかは私立碧陽学園へきやうに通うことになりました。

私の名前を聞いて疑問に思った人もいるかもしれないが、まあ、その話は追々話していくとして。私の名前を聞いてもピンと来なかった人は…そうね、私のことを話すとするとラノベ六冊相当の物語をしなければならぬので割愛させてもらうから。でも、多分知らないからといって、つまらなくなる訳じゃない…と思うのだけど。…誰に話していたのだろう。気にしないでおう。

「2年B組…ここね。」

そんなことを考えていたら目的の教室に着いた。教室ではちょうどホームルームをやっている最中だった。ナイスタイミング、私。

「お、来たようだ。入ってきたな。」

呼ばれ、教室に入っていく。

…自己紹介なんて言おうかしら。やっぱりインパクトは大事よね。

「ここで自己紹介しな。」

「わかりました。」

さて、人生二度目の高校生デビューといきましょうか。

「現守高校あらかみからやってきました、水月鏡花です。最近見て、はまったアニメはAngel eats!です。10話は神回だと信じられています。よろしくお願いします。何か聞きたい事がある人い

ますか？」

…ビックリするくらい静かな教室。みんなが呆然としているのが伝わってくる。TPO間違えたかしら？と思っただら一人の男子生徒が手をあげていた。

「はい、どうぞ。」

「美少女の味方、杉崎鍵です。好きなタイプを教えてください。」

…杉崎君はこういう人だと、心のメモに書いておく。結構気が合うかもしれない。あくまで友達としてだけ。

「その質問に答える前に言っておきます。私は百合だ！」

『まさかの転校初日にカミングアウト！？』

「そんな…。折角の美少女が。」

一斉にツッコむクラスメイト。

崩れ落ちる杉崎君。

うん、とても楽しい学園生活になりそうだ。

## ぶるるーぐ2

「成る程。深夏はミスコンで、杉崎君は優良枠で役員になったのね。私も出たかったなかも、ミスコン。」

「だからミスコンじゃねえって。でも確かに鏡花だったらい線いっただんじゃねえか？」

今は生徒会役員の深夏と杉崎君と生徒会室へ向かっている途中です。何か渡す資料があるらしい。詳しくは聞かされていないんだけど。あ、そうそう。あの後、クラスにアイドル星野巡がいたりその弟の守君（姉弟共々名字で呼ぶことを禁止してきた。カッコいいのに。）の超能力（笑）に付き合わされたりと色々ありました。が、「日常のp95」と代わりばえないよ。」という電波を拾ったため省略。

「まあ、外見はそこそこ自信あるけど、中身は典型的なオタクよ？」

「そんなこといったら、あたしの妹も役員だけど相当だぞ。鍵に至っては『趣味、エロゲ』を公言してるしな。」

「へー。じゃあ、杉崎君。T Heart 2で好きなキャラクタ―は？ちなみに私はさーらだけど。」

「…鏡花は本当に俺の周りにいなかったタイプ的美少女だよな。そして俺はハーレム思考だから誰が一番とかは無い！」

「…あのゲームにハーレムルートあったかしら？それにそんな美少女連呼しても私は落ちないし、深夏は嫉妬するしでいいことないわよ。」

「だ、誰が嫉妬するか！」

「…そんないい反応しなくても。あ、ここじゃないの？」

「お、もう着いたのか。美少女と話していると早いな。ささ、どうぞどうぞ。」

「だから落ちないってば。じゃあ、お邪魔します。」

で、中に入って生徒会長の桜野くりむ先輩（ちっちゃい。サリーといい勝負かも）、書記の紅葉千弦先輩（…これは先輩と同じ人種だ）、会計の椎名真冬ちゃん（…腐女子か。軽く陽慈の顔が浮かんだが気にしないことにする）との自己紹介を終えると、紅葉先輩が何か色々と持ってきた。

「はい、これが資料一式。」

「ありがとうございます、紅葉先輩。ええっと、生徒手帳と補助金の申請やらと…生徒会の一存？この表紙に書いてあるのはもしかして桜野先輩ですか？」

「はい、それは私たちの活動を本にしたものなんです。会長さんのアイデアで。」

「そうよ、私のアイデアよ。鏡花、褒め称えてもいいのよ？」

「凄いいねー、エライエライ。…このラノベは知らなかった。ちよつと読んでみていいですか!？」

『そんなに興奮しなくても…。』

しばらく読み続ける私。と、ここで気になる記述を発見。えーっと、これは…。

「…ねえ、真冬ちゃん？」

「はい、なんででしょうか？」

「この『中に居る』の話ってどこで聞いたの？」

「あ、水月先輩も怪談好きなんですか？」

「ちよつとね。で？」

「ネットで見つけただけですよ？」

「…そう。じゃあ、紅葉先輩。この顔剥ぎの話はどうやって知りました？」

「アカちゃんが怯えてるしこの話やめないかしら？」

「…別に解決したからいいんですけど、これ警察が情報規制しているから、一般人は詳細が分からないはずなのですが。」

「…何でそんな事知ってるのかしら？」

「桜野先輩が怯えているのでこの話はやめませんか？」

ニヤリ、と笑いながら言う。こういう癖はまだ直らない。直すつもりもないんだけど。それにしても神無家の情報規制緩くなってるんじゃないかしら。深螺は何をしているのだろう。

「…ええ、そうね。」

「珍しい。知弦さんが口で負けるなんて。」

「ふふん。経験がちがうんだから。さて、続き読ませてもらってもいいかしら？」

「気に入ってくれて何よりなんだが、明日から中間試験だから取り敢えずもうここは閉めなくちゃならないんだ。そろそろ完全下校時間だし。」

「あー、そんなのもあったわね。」

「勉強は大丈夫なのか？転校してきた次の日で。」

「そうは言ったって高校の勉強なんてどこも代わり映えしないし。」

「それもそうか。」

「深夏は大丈夫そうだけど桜野先輩は…あ、今の空気で分かったんでいいです。」

「…ぐすん。」

「泣いちゃった！？はい、私が悪かったです。だから泣き止んで！」

…結局泣き止むまで30分もかかりました。これから桜野先輩をいじる時は気をつけよう。

で、正門前にて。

「じゃ、明日の前フリとして…」ふん、いいだろう。次の中間テストでちよつとした芸をみせよう」。

「…何だ、それ？」

「…あれ？誰にも伝わってない。さすがにノベライズ版は地味すぎたかしら…」

『？』

「…ヒント。トライルト。」

「…ああ、作品は分かりました。でもノベライズは手を出してなかったですね。」

「お、さすが真冬ちゃん。あの作品は「涙」集めるのが面倒だったよね。」

「ですねー。」

「…真冬。ゲーム談義に花を咲かせるどこ悪いが、帰るぞ。」

「あ、そうだねお姉ちゃん。それでは皆さん、また明日なのです。」

『また明日ー。』

後日、テスト返却時

「おおー、さすが優良枠。やるね杉崎君。」

「さすが私の杉崎ね。」

『また明日ー。』

後日、テスト返却時

「おおー、さすが優良枠。やるね杉崎君。」

「さすが私の杉崎ね。」

「おい巡、誰がお前のだって？…ハッ！まさか生殺与奪は自由だという意味か！」

「違うわよ！何で私はそういう解釈しかされないわけ！？」

「そついや鏡花はどうだったんだ？自信あり気だったけど。」  
「あー、見せたほうが早いわね。」

数学55点

「…まあ、悪くはないが…。」  
「平均点より少し下だな。」

理科66点、社会77点、理科88点、英語99点

『……………』  
「いやー、上手くいって良かったわ、ホント。」  
「こ、これまさか、わざと？」  
「ええ。どう？おもしろかった？」  
「おもしろいかおもしろくないかを越えてて、シャレになんないわね。」  
「シー・カノンと同じ反応をありがとう、巡。」

## 第0話 現れる水月鏡花

そもそも私が碧陽学園に転校してきたのは理由がありまして。

太陽に掲げた手のひらは、キラキラと、眩しく、輝いていた。そうして僕の意識はしだいに薄れていった…。

…あれ？まだ意識がある。と、眼を開けてみると…。

「えーっと、ユウ？だよな？あれ？さっきのはやっぱり幻聴で幻影？…恋人との感動の再開なのに悪いけど、質問いいかな？僕は死んだはずじゃないのか？いや死んだのはもう4年前だけだよ。」

「うーん。そうなんだけど。一つバグが見つかって。それを。ケイに。処理してもらいたいんだ。」

「なぜにとある姫 みさんチックに句点のみ。そんなの深螺たちが何とかするんじゃないのか？」

「いやー、それが私でもちよっと原因が分からないようなやつでね。」

「…もしかして零音の時と同じような感じ？」  
「うん。」

「確かにあんなのがもう一回となると厄介だね。それで僕の出番か…それにしても、あんな別れ方した後にみんなとどう会えと？ものっそい気まずいんですけど。」

「とはいいつつもやる気じゃん、行った後のこと気にするなんて。」

「…まあね。アリスにはああ言ったけど責任感はそこそこあるつもりだよ。で、どんな状況なの？」

ユウが分かっていること、僕にやって欲しいことをまとめると、

・場所は私立碧陽学園

・そこでは人の思いが形となる…らしい。これが分からないから調査よろしく、とのこと。

・碧陽学園には「企業」という組織が裏で糸を引いていて、その「企業」とやらは碧陽学園を「神の視聴区域」としていているらしいがそんなことは無く（確かに見てはいるけどね）、おそらく前項のため（そんな場所があったらいいと誰が望んだため）そのような現象が起きていると思われる。

・ま、要するに、潜入調査及び解決お願いします。

「…こんな感じ？」

「あー、後一つ。潜入調査する時は『水月鏡花』でやって欲しいんだけど。」

「…何で？」

「私の干渉を最低限にしたいからだよ。『式見螢』は新聞記事の改竄とかがややこしいからね。さすがに死んだ人間が普通にいたら気づく人がいるでしょ。だったらいつそ本来は存在しないものにした方がいい。それに『水月鏡花』だって世界にいたんだからそんなに無理しなくても存在割り込めるし。ま、帰宅部の皆さんとの対応はケイに任すから。」

「分からないけど…分かった。もう行っていいのか？…と、そうだった。…もう行っていいのかしら？」

「うん。ごめんね、ケイにはっか色々やらせちゃって。」

「かわいい恋人のためだしね。あと、私は水月鏡花よ。」

「おお、すごい順応性。じゃ、大丈夫そうだね。いってらっしゃ

い、4年後に。」

「いつてき…今、何か変なこと言わなかった？」

「逝つてらっしゃい。」

「ちょ、ちょっと待ってユウ！何なの4年後って！そして字が絶対おかしいってー！」

目が覚めるとそこは…。

「…知らないてん？…うん。落ち着け私。で、ここ何処かしら？そもそも本当に4年後？あ、置き手紙発見。えーと、なににな。」

ハロハロー、ケイ。気分はどう？その家はケイの家だから自由に使つてね。あと記憶の中に4年分の主な出来事入れといたから、思い出そうとすれば思い出せるから。

じゃ、転校は5日後だから頑張つてねー。

「…えー。本当に時を越えましたか。ガー ット歌うよ？まったく…と、取り敢えず思い出せばいいのね。…ハートの るこは…一人でボケ倒す前にさっさとすまそう。…ハッ！」

…これは本当に勘弁して欲しい。本当に久しぶりにあの口癖が出そうだ。我慢するけどね。代わりに某人間失格のやつを。

「傑作ね。ユウ、あなたにとって主な出来事はゲーム、漫画、アニメなのね…。」

転校するまでの5日間はパソコンでの情報收拾だけに費やしました。…政権交代くらい教えてくれてもよかったですと思つ。

く鏡花の去った後でく

ねえ、ケイ。

やっぱりケイは幸せになるべきだよ。

ケイにこう言ったら十分幸せだった、って言うだろうから言わないけどね。

…うん。たぶん、これは私の自分勝手な我が儘。

でも、やっぱりケイにはもっと人生を楽しんで欲しいんだよ。

私の分も、さ。

も、もちろん調査して欲しいのもホントだよ!?

だけど、楽しんできてね、ケイ。

ケイも言ってたけど、やっぱり生きてるって素晴らしいことだよ。

でも…私が隣にいられないのは…少しだけ残念かな…。

## 第1話 提案する生徒会 + 1

「健全な精神は健全な肉体に宿るものなのよ！」

…桜野くりむ先輩がいつも通り（らしい）何かの受け売りのような台詞を言っている。

「元ネタは那 多さんですか？」

「いや絶対違うだろ。他にも色んな人が言ってると思うぞ。確かにあれも生徒会の話だけれども。」

「天空のユ ナが分かるのね。…成る程。趣味エロゲは伊達ではないと。」

「おう、エロゲマイスター杉崎鍵をヨロシク！」

「あー、こほん。今日は見学として水月鏡花さんが会議を見学します。」

「よろしくお願いします。」

「今日の議題はこちら！」

「えーっと、『体育祭のプログラム』ですか？」

「そう。今日は10月にある体育祭について話し合います。」

「（紅葉先輩、何か本で読んだ印象と150度くらい違うんですけど。）」

「（アカちゃんが『今日は転校生に生徒会が遊んでばかりではない所を見せてやる。』って燃えてたから。）」

「（ああー、成る程。）」

そついう事なら聞き役に回っておこう。隙あらばボケる気満々ですが。

「そこ！何をこそこそ話してるの！-」

『いえ、別に。』

「…まあいいわ。で、何か意見はない？」

「あのー、一ついいですか？」

「何？真冬ちゃん？」

「去年はどんなことをやっただんですか？そんな変えたいほど酷いことをやっただんですか？」

「去年は、まー普通だったな。一日目がサッカーとかドッジボールで二日目は騎馬戦とか棒倒しとか。それで会長さんは変えたい、と思っただけらしい。」

「そうなんですか。」

ちなみに碧陽学園の体育祭は二日間の構成で、一日目がクラス対抗の球技大会、二日目が色別の体育大会（騎馬戦とか）をやる…らしい。

「ちなみに一昨年はアカちゃんがパン食い競争でジャンプしても届かず…っていうのがあったわね。」

『あー。』

「ち、ちよつと知弦！？余計なこと言わないでよ！みんなも残念そうな目で見るのやめて！…まあ、深夏の言った通りだから。」

「はい！ぜひ、今年は、プールを解禁しましょう！」

『杉崎（キー君、先輩、鍵）は水着姿が見たいだけでしょ（よね、ですよ、ね、だろ）。』

「おお、全員で突っ込んできた。でも真面目な話悪い話ではないと思うんですけど。クラスに二人くらいいませんか？スポーツだめだけど、妙に泳ぐのが速い人。」

「…10月だとさすがに寒いでしょ。いくら室内プールとはいえ。」

「…それもそうですね。では本命。障害物競争をおもしろくするのはどうでしょう？」

「障害物競争？」

「…杉崎君。元ネタは？そう言ったからには何かビジョンがあるんでしょ？」

「…T Love ですよ。」

「漫画版？アニメ版？」

「…漫画版です。」

「ダメでしょ、プールなんかよりよっぽど。アニメ版なら考慮の余地あるのに。」

「ええと、どゆこと？」

少女説明中。簡単に言つと水で下着が透けて見えるのが漫画版。『これは彼の子よ。それでも彼を愛せる？』とか、『彼が刑務所から出てくるまで20年。待つことが出来ますか？』がアニメ版。最初みた時大爆笑したわ、あれ。

「…という感じ。ネタを引っ張るなら借り物競争がいいかも。さすがに伝説の剣はあれだけど。」

「なるほど、借り物競争つと。」

「…ネタが完璧に潰された…。知っている人がいるというのはこんなにもやりにくいのか…。」

「杉崎の魂が抜けちゃったみたいだし、他に何か無い？」

「はい。じゃああたしからも提案が。」

「…天下 武闘会とか言わないでよ。」

「さすがのあたしもそんな単純なことは言わないぜ。騎馬戦あるだろ？」

「あるわね。」

「だったら空中戦があつてもいいと思うんだ。」

「思わないでくれる！？どうやるの、それ！？」

「さくつと浮かんで、バトル。」

「何人が参加できるのよ、それ。」

「クラスに…4、5人？」

「そんな割合で超能力者がいてたまりますか！後、天下一武 会と  
なんら変わらないきがするんだけど!？」

…突っ込みすぎで息切れしたらしい。ボケたおしてる所を見ると、  
桜野先輩以外は特に不満は持っていないわけね。私も体育祭なんて  
シンプルなのが一番だと思つもの。

「桜野先輩、疲労困憊なので、選手交代しましょう。」

「…まだ頑張れるもん。」

「桜野先輩にはまた後でやりたいこと聞きますんで考えておいてく  
ださい。」

「…分かったわ。」

『扱いが上手い…。』

「で。深夏、他には?」

「ああ、サッカーとかってどうしても部活でやってる連中有利だろ  
?」

「それで?」

「その点ドッジボールは部活がないから皆が平等だ。」

「…つまり、部活にない競技を増やそうと。」

「そうだ。そしてあたしはカバディを推奨する!」

「いや、深夏さすがにそれは…。」

「…いいわね。気が変わったわ。」

「え!?!どうした聞き役!」

「じゃあどうして反対なの?」

「いやいやカバディだよ?」

「杉崎君(鍵)、あなた(お前)はカバディの\*の字も分かってい  
ない(わ)!」

「…なんで\*が出てきたのかは置いとくとして、確かに詳しくは知

らないけれどさ。」

「カバディはインドの国技でアジア大会もやってて、日本だってそれに出場しているのよ。そもそもカバディは…。」

長くなるので割愛。せんの…説得すること30分。

『やろう、カバディ。』

「みんなどうしたの!? 私が考えている間にいったい何が!」

『そうだ、カバディやろう。』

「やらないよ!? き、鏡花、これ、何があつたの?」

「私がカバディの魅力について熱く語りました。」

「あんた原因かい!」

「いやですか? カバディ。」

「いやだよ!」

「…みんな…。会長がどうしてもカバディやりたくないからダメだつて。」

『ええー。』

「…この生徒会たまに私を拒絶するわよね…。」

「真冬ちゃんは何かない?」

「真冬ですか? そうですね…。真冬は体が弱いので、体を使わないようなのがいいです。」

「ゲームは駄目だからね。」

「え!?! どうして分かったんですか?」

『…単純すぎる。』

「ぶよ よでも駄目ですか?」

「ゲームの種類の問題ではなくて。真冬ちゃん、頭使っちゃつていう方向性は間違つてないからさ。何か出そう。意見を。」

「じゃあ…、色んなポーズをとる青銅色の巨人を倒さないように…」

「というのはどうでしょうか？」

「まさかのジヤイ、ントクラッシュ！さすがにそんな装置作る予算は無いんじゃないかな。…って会計あなただった。無理でしょ？」

「…じゃあ砂の山に旗を挿して…。」

「…やりたいの？全校生徒で、それ。」

「楽しいと思いますよ。一人ずつ、少しずつ。」

「…52人でやるダウト。」

「？何ですか？」

「たぶん、『なかなか回ってこなくて飽きる。しかもつまらない』  
と言いたいんじゃないかしら？」

「紅葉先輩、正解です。」

「…しゅん。おもしろいのに。」

「（…この子は教室で普段何をやっているのだろう。）」「

「紅葉先輩は…何も無さそうですね。」

「ええ、基本的には今のままでいいのだけど…。」

「何か？」

「優勝賞品が欲しい。」

「ものすごく俗っぽい意見が出ました。…無いんですか？前の学校  
はありましたけどね、校章入りのタオルとか。」

「そういうのではなくて…もっと有効活用できるものが欲しいのよ。」

「使い勝手よくないですか、タオル？」

「だって校章が入っていたら、学校でしか使えないじゃない。」

「…まあ、確かに。それでどんなものが欲しいんですか？」

「土地。」

「夢の無い高校生ですね。」

「じゃあ、金の…。」

「延べ棒ですか？また夢がありませんが。」

「の。」

「ここでメロンパン入れの登場!?そしてどう有効活用するんですか、それ!」

「いらっしゃいませ、って言う。」

「それしかできませんよねえ、きの脳!」

「なら、ひしくん人形。」

「…やめましょう、この流れ。」

「…そうね。じゃ優勝したチームは現金がもらえるということですか。」

「一番夢の無い所で落ち着きましたね。どうあがいても無理ですからね、それ。」

「さて、いよいよ桜野先輩です。考えはまとまりましたか。」

「うん、私は既存のものに囚われない全く新しいものを提供するよ!」

「…今までも十分囚われてないものが出てきましたが。これらを越えると。いやな予感しかしません。」

「ふふふ。そう言ってもらえるのも今のうちよ。さあ、我がアイデアにひれ伏すがよい!」

『(前振り長すぎ…)』

「私は体育祭の競技としてパターゴルフを提案する!」

『(…画期的?)』

「あまりの衝撃に言葉を失っているようね。」

「予想を大きく下回る回答に呆然としているのですが…。なぜ?」

「私が得意だから。」

「最低だこの人。」

「だって勝てないんだもん。他の競技じゃ。」

「可愛く言って誤魔化されるのは杉崎君くらいよ。」

「…まあ、そうね。今のは置いといて、さっきから考えてただけ

ど、何をするにしてもやっぱりやってる人が楽しまなくちゃいけないじゃない？」

「それは勿論そうですが。」

「だったら私たちが盛り上げればきつと楽しい体育祭なるよね！」

「…生徒会の一存の展開としては『会長はなんだかんだいっても碧陽学園の生徒のことを考えているんだな』みたいな締めに入るんでしようけど、私は勝利のために生徒会を利用したあなたのハングリ―精神は忘れませんからね。」

『展開を読まれていた！？』

「それに盛り上がりにおいてカバディに勝るものなんてないしね。」

「まだ引つ張るの！？」

「だったらやっぱりプールの解放を！」

「空中戦を！」

『是非！』

「…これどうやって收拾つけるのよ。」

「ええ、まったく。」

「…終わらせられるところで火を点けた先輩には言われたくないと思いますよ。」

「さすがの私でも、悪名の高さでは、窒素酸化物にはまけるわね。」

「いったいどういう意味ですかそれ！？」

「さあ？この前読んだ参考書に出てきたのだけど。」

「どんな参考書ですか…。」

『是非！』

「…まだやってたのね。杉崎君と深夏。そして紅葉先輩。ちゃっかり申請書に優勝商品として戸籍を申請する、とか書くのやめていただけませんか？」

「あー！もーいやー！」

「…桜野先輩も壊れちゃったし。さて、さすがに收拾しますか。」

そう言いながら思わず微笑む。私もすっかりこの空気に毒されたよ

うだ。元々こんなだったという話もありますが。…碧陽学園生徒会。そこはいつも笑いが溢れている、素晴らしい場所かもしれない。

「にゃー!」

「だってプールだよ美少女だよ水着だよ？魅力を感じない方がおかしいだろ。」

「鍵は無視するとして。じゃあ塹壕戦ならどうだ？」

「何で『あかし妥協しました』みたいな顔してるの!？」

「それいいね、お姉ちゃん!」

「にゃー!」

「真冬ちゃんまでどうした!？」

「だって穴掘れるんですよ？魅力を感じない方がおかしいです!」

「…真冬ちゃんは砂遊びがしたいだけなんだね。」

「…よし、あとはこれを提出すれば…」

「何してるんですか知弦さん!？」

「にゃー!」

『会長（会長さん、アカちゃん）は取りあえず泣き止んでー!』

…たまに混沌すぎてあれですが。ちなみに借り物競争はきちんと成立したみたいです。

## 第2話 呆然とする水月鏡花

突然ですが私は今化物に追われています。…まあ、私も化物みたいなものですが。並みのやつには負けるつもりはないのですけど、なぜこんな事になっているかといえますと、これは約10分ほど前に原因がありました…。ああ、焦っているから思考がまとまらない。

「さて、今日も始めますか。」

碧陽学園に転校してから、私はずっと深夜の校内探索を行ってきた。さすがに真つ昼間から何かを探すような真似は疑ってくださいと言っているようなものだし、この学園には防犯カメラの類がないので侵入してしまえばバレる心配が少ないから、というのも深夜に行っている理由である。…それにしても《企業》とやらはこんな警備でいいのだろうか？最も、私にとっては好都合なわけですが。

「以上、堅苦しいモノローグ終了、水月鏡花がお送りしました。つて、私は誰に何を説明していたんだろう。…探すのはいいのだけど、不審なものを見かけたことないのよねえ。…退屈だし一人漫才でもしようかしら。…シヨートコント『こんなコンビ二はいやだ』。」

と、その時

ガタツ、ガタツ

人が渾身のギャグをやるうとしている時に物音が聞こえてきた。…近いわね。行ってみましょうか。

…気配を消しつつ音がした教室に近づき、窓から様子を見てみると、  
「なんだ、ただのネコか。…私は何を素で死亡フラグを言っている  
のだろう。」

だつてしょうがないじゃない！本当にネコだつたんだもの！凹むのも程々にして…さて、探索を再開しますか。とネコに背を向けたその時、鋭い殺気を感じたので思わず振り替える。

「……………」

すでにネコの姿はなく、代わりに何か黒いものが集まってきている。見ているだけで吐き気がするような、黒いもやだ。そしてそのもやが徐々に形作られていき…。

「きゃああああああああ！」

ものっそい大きな、黒光りするGが、出来上がりました。黒光りするG…英語だと cockroach、black-beetle  
とも言つらしい。これを聞いたとき、「Change black beetle！」いけるんじゃないかしら、必殺技はきつと「ライダータックル」ね、と思った記憶があつたりなかつたり…ああ、思考が現実逃避気味になっている。どんだけ強くなつても生理的嫌悪には勝てないと思うわけですよ！と、文句を混乱した頭でいいながら全力で距離をとっていると、

ワサワサワサワサワサワサワサ

やつが追ってきた。

ここで一つ豆知識を。虫には色々とスペックの高い奴がいます。

例えば、ノミは体長が3ミリメートル程度にもかかわらず垂直で20センチメートル跳ぶ。これは人間の大きさに換算すると何と80メートル…ビル20階に相当するそうだ。では、今後ろから猛然と追い掛けてくるGはというと、皆さんも奴の足の速さは知っていると思いますが、あの体で秒速50センチメートル、人間の大きさに換算すると100メートルを5秒、つまり時速72キロメートル…自動車なみの速さになるそうです。で、例のやつは目測でおよそ8メートル。つまり何が言いたいかというと。

「速iiiiiiiiい！何あれ、速すぎでしょ、いくらなんでも！というか足の動きが気持ち悪すぎる！無理無理無理！」

…顔剥ぎなんかよりよっぽど気持ち悪いです。はい。あれを女の子に相手させるなんて正気の沙汰じゃないわよ、まったく。…最近、自分が元々男だったことを忘れかけている気がしてならない。

というわけで逃げ回っていて、事態は全く好転せずに冒頭に戻るわけですよウトン君。…頭の中で整理して少し落ち着いた。やつぱりあれは私一人で何とかしなくちゃいけないようね。いや分かってただけけど。…でも真面目に結構強いほうだと思ふのよ、あれ。広いところだったら負けていたかもしれない。廊下で良かった。ありがとう廊下。貴方の評価は私の中で羽毛布団、スーパチャーハンのレベルよ。

「はあ、やりますか。気乗りしないけど。じゃあ、景気付けに…」  
さあ、お前の罪を数えろ！」

ようやく戦いの火蓋が切って落とされた。…しつこいようだけど、戦いたくないなあ。

「と言ったもののどう倒しますかねー。触りたくないし、かといってボウガン作っても表面の油で無効化されるだろうし。」

考えながら突進を避ける。これが結構重労働だ。なんといっても速い。…大きさを単純倍すると時速360キロメートル。これが奥歯にスイツチあるんじゃないかってくらいの加速で一気にトップスピードになる。そろそろ避けきれなくなるかもしれない。短期決戦に持ち込まないと、こんなやつにやられてしまう。それだけは避けなければ。

「…しょうがない。武器でも作りますか。本当は近寄りたくすらないけど。害虫駆除に使えそうな形状は…八工叩き？いやいや、八工叩き片手に戦うヒロインとか斬新すぎるでしょ。えつとじゃあ…。…ちよつと待って。久々だったから忘れてたけど、物質化範囲に入れないや殴れないじゃない。…てことはあれ殴るの？…テンション下がるなー。」

細かい説明をしておきますと、霊体物質化は有効範囲に入っているものを無条件に物質化する、なので例えば1メートルの槍を創ったとしても、槍は物質化するけど、相手（霊体）に効果があるのはその霊体本体が物質化範囲に入ってなくちゃならない。すっかり忘れていた。よかった、ちめーてきなミスにならなくて。

テンションの下がった勢いでこいつを見逃すと面倒なことになる、というのを理解出来るくらいには落ち着いてきた。…こんなものの戦闘描写なんて誰得だし、さっさとケリつけちゃいましょう。私だつてこれ以上視界に収めたくないし。

「アニメは偉大よね。映像としてイメージを与えてくれるのだもの。」

では、いきますか。『能力（フラグメント）、変身（ドツペルゲガー）！』よし、これで素手っぽくない。」

状況を説明すると、手がドリルになっていきます、まる。いくら見た目を変えようと自分の体は自分の体なんで気分の問題ですが。タイミング見計らって…止まった瞬間を……。

「今だ！『デッドリーメイルス ロム』！」

ドリルを回転させて、一気に貫く！

「『判決、死刑！』あー、すっきりしたけど、なんだったのかしら。悪霊の類なのは分かるんだけど…。それにしても『悪意』を感じなかったのよねえ。あれが『人の思いを形にする』っていうこと？誰よあんな気持ちの悪いもの考えたのは。何はともあれ一応進展ね。ま、今日のところは帰りますか。」

（翌日・朝）

マテリアルゴーストになりました、人間が生きていく上で必要なものも要らなくなっているのですが、それでもお腹はすくんです。深螺は「幽霊は精神体ですから人格を保つためにはやはり人と同じ事をする必要があります。」なんて言っていたっけ。要するに、人として生きていくなら人と同じことをする必要ある、ということなのだろう。

何故、急にこんな話をしたかというと。

「……眠い……。昨日あんなドンパチやったからよね……。『眠気を感じなくなる指輪』でも創ろうかしら……。ああ、そんなことしたら靈力余計に使って倒れるわね……。」

今のこの眠くて死ぬそうな状態を理解していただきたいからです。  
…寝たい。本当に眠い。…状況を説明しますと、今日は朝礼があり  
まして、何でも新しい先生が来るそうなので、その紹介をするそうです。  
あー、あれは桜野先輩…。司会やってるのね。…ヤバイ。意識飛  
びそう…。

「新任教師挨拶。ま…マギル？沙鳥先生、お願いしましゅ。」

……………ん？

### 第3話 会合する帰宅部

（鏡花サイド）

「えー、ご紹介に預かりました…」

壇上で何かを語っているが全く耳に入っていない。…本当に先輩？えーっと、どうしよう。いや勿論こつちから名乗り出るのがいいんだらうけど…。あんな別れ方した後だとやっぱり気まずい。

「私が来たのは君たちをただのマゲッツから優秀なマゲッツにするためで…」

それでもただ単に私が「4年間音沙汰無し」というだけだったら声を掛けただろうが、私の立場が複雑な上、先輩のレギュレーションも分からない（この時期に来たんだから《企業》と無関係とは考えにくい。）という状況ではそうすることにも躊躇してしまう。前から私と親しかった、というだけで私の正体がバレた時に危害が及ぶ恐れさえある。…警戒しすぎかもしれないけど。

「人はみな平等ではない。…」

だから私情だけで選択するわけにもいかない。さて、本当にどうしようか。

「要するに私が覚えておいて欲しいのは、『牛肉は枝毛予防に良い』ということだ。以上。」

…そんな事を考えていたらいつの間にか朝礼は終わっていた。その時には眠気なんて何処かに消えていた。

（放課後）

…気が付いた時には放課後になっていた。いつもなら「キングクリムゾンだ！」とか言うんだろうなと客観的に思う。

「鏡花、大丈夫か？」

「あ、杉崎君。…私、そんなに変な顔してた？」

「ああ。見ているこっちが不安になるくらい、すごい考え事をしている顔だったな。」

「…そう。実は…。」

「実は？」

「クエン酸つてあるじゃない？」

「あるな。…それが？」

「あれの構造式のエロさは異常だな、と。」

「そんな事を一日中考えてたの！？っていつかその話どつかで聞いたことある気がするの。気のせいですかねえ！？」

「これだけじゃないけど…他も似たようなものね。聞きたい？」

「遠慮しておきます。」

「そう。残念ね。」

「…鏡花。俺で良ければいつでも相談乗るからな？」

「…ありがと。気持ちだけ受け取っておくわ。」

「そつだ。生徒会室来ないか？気分転換なるだろ。」

「昨日も行った気がするけど…。ま、いいわ。お邪魔させてもらおうかしら。」

生徒会室

「友情という絆ほど、固く、美しいものはないのよ！」

桜野先輩がいつものようになにかの本の受け売りを語

「それは違うな。」

れなかった。…て。せ、先輩！？何でこんな所に…。

「友情が固い？美しい？はは、久々に聞いたよそんな薄っぺらい言葉。」

「な…。」

…どうしちゃったんだろう。何か辛いことが…いや、私死んだことは辛いことだと思いますが。みんな黙っちゃったし。何この居た堪らない空気。

「名言を、薄っぺらいなんて一言で済まして斜に構えている人間こそが、実際は一番薄っぺらいのよ！」

そしてその空気を壊す人が一名。…成る程。これが桜野先輩が桜野先輩たる所以か。

「そうだな、お前の言う通り。斜に構えてた人間ほどいけ好かないものはない。悪かった。」

「え…：ええ！そう！分かればいいのよ！」

「それで、真儀瑠先生…：でしたよね？何で新任教師が生徒会室に？」

…：その前にこつちから一つ質問いいか？生徒会のメンバーは5人と聞いていたのだが…：お前は誰だ？」

そういつて先輩が指差したのは…。

「私…ですか？」

…さっきまで他人事だったのに。どうなるのこの状況。

「私は水月鏡花、転校生です。」

「ほう、転校生か。前の学校の名前は？」

「…現守高校です。」

「私も現守の出身なんだ。」

「へー。そうなんですか。」

…分かってて聞いているのだろうか、この人は。…そうなんだろうな。いくら取り繕うと先輩の目は誤魔化せないわよね、例えば女装していたとしても。よし、なら、先制攻撃だ。

「じゃあ真儀瑠先生のことを『先輩』って呼んでもいいですか？」

ニヤリ、と笑いながらそう言い放った。

「…ッ。…お前が私を『先輩』と呼ぶなら……私はお前を『後輩』と呼ぶこととしよう。」

「ええ、そうしてください。」

…先輩は誰かの入れ知恵があるのかもしれない。やっぱり必要以上に親しくするのは危険かな…。きちんと話せるのは全てが終わった後かな。

「杉崎君。」

「な、何だ？」

「ありがとう。お陰で解決したわ。」

「そ、そうか。それは良かった。」  
「では、用事を思い出したので帰ります。先輩、また明日会いましよう。」

「…ああ、また明日な。後輩。」

そう言っつて生徒会室を出ていく。…うん。何はともあれ、一件落着。今日も深夜の探索頑張りますか。

（真儀瑠サイド）

1週間前

はろはろー。

お久しぶりです、先輩さん。  
7年ぶりですね。

えー、要件を言います。

これからある事を頼まれると思いますが、受諾しましょう。これはお告げです。

そしたらプレゼントがありますから。でもそのプレゼントを楽しむのは全てが終わってからの方がいいかも。

…ところで、こういうのも夢枕に立っつていうんでしょうか。

あ、そろそろ時間だ。ではでは、良い人生を。

「…変な夢見たな。」

現在

「えー、ご紹介に預かりました…」

私は今、新任教師挨拶とやらで壇上に立たされている。適当に何かを話しておけばいいだろう。

「私が来たのは君たちをただのマゲッツから優秀なマゲッツにするためです…」

さて、その間に今の状況を整理しておこう。

私は都内で教師をやっていた。

私立碧陽学園に臨時教師として行け、という辞令を受ける。

行くと「手伝って欲しいことがある。」と理事長に話し掛けられる。

それに同意することにする。

…単純な状況とは言い難いな。

理事長の頼み事とは「現場で動いている枯野という男をどうにかして欲しい。」ということなのだが、理事長の第一声が「神に興味ありますか？」だぞ。何の新興宗教だ。

「人はみな平等ではない。…」

しかし私には幸か不幸か、「神」と呼ばれる存在に心当たりがある。そして、ふと1週間前に見た夢を思い出した。…もしやあれは…、と思い協力することになった。

「要するに私が覚えておいて欲しいのは、『牛肉は枝毛予防に良い』というのだ。以上。」

…さて。挨拶も終わったし。動くとするか。…なんかみんな亜然としているが、私は関係ないな、うん。

放課後

私は理事長が用意した現状打開のための切り札として《企業》で働くこととなっている。さて、理事長には好きにしていっていいと言われているし、噂の生徒会にちょっかい出しにいつてみるか。

「友情という絆ほど、固く、美しいものはないのよ！」

…生徒会室から何やら聞こえてきた。…ふむ。少し挑発的にいつてみるか。

「それは違うな。」

といいながら扉を開け、ツカツカと入った行った。

「友情が固い？美しい？はは、久々に聞いたよそんな薄っぺらい言葉。」

「な…。」

さて、これでどんな反応をしてくるかな。

「名言を、薄っぺらいなんて一言で済まして斜に構えている人間こそが、実際は一番薄っぺらいのよ？」

…成る程。これが生徒会長、桜野くりむか。

「そうだな、お前の言う通り。斜に構えてた人間ほどいけ好かないものはない。悪かった。」

「え…ええ！そう！分かればいいのよ！」

ここで初めて生徒会室内を見渡す。右から紅葉知弦、椎名深夏、椎名真冬、桜野くりむ、杉崎鍵、そして…もう一人いる。いや、それはいい。そういうこともあるだろう。もしや…後輩…か？ありえない、だがこの私が後輩を見間違えるとも思えない。例え女装していたとしても。

「それで、真儀瑠先生…でしたよね？何で新任教師が生徒会室に？」

「…その前にこっちから一つ質問いいか？生徒会のメンバーは5人と聞いていたのだが…お前は誰だ？」

「私…ですか？私は水月鏡花、転校生です。」

「ほう、転校生か。前の学校の名前は？」

「…現守高校です。」

「私も現守の出身なんだ。」

「へー。そうなんですか。」

話ながら疑念が確信へと変わっていく。本当に、本当に後輩なのか。

「じゃあ私は真儀瑠先生のことを『先輩』って呼んでもいいですか？」

「…ッ。」

100%、決定だ。その顔でそんなことを言う奴は世界でただ一人だ。けれど私は持てる理性を総動員して今すぐにも抱きつきたい気持ちを抑えた。私はこの時点で1週間前の夢がユウの見せたものであることを疑っていなかった。あの夢でユウはプレゼントは後で楽しめと言った。つまり、私と「水月鏡花」が昔からの知り合いだと何かしらの不都合が生じるのだろう。…それはそうだな。私との関係を調べていったら間違いなく「式見螢」の名が出てくるだろうからな。いや、それ以外にも何かあるのか…。

「お前が私を『先輩』と呼ぶなら……私はお前を『後輩』と呼ぶこととしよう。」

でもこれくらいは許してほしい。

「ええ、そうしてください。…杉崎君。」

「な、何だ？」

「ありがとう。お陰で解決したわ。」

「そ、そうか。それは良かった。」

「では、急用を思い出したので帰ります。先輩、また明日会いましょう。」

「…ああ、また明日な。後輩。」

そう言つて後輩は生徒会室から出ていった。

「…真儀瑠先生と水月さんは知り合いなのでしょうか？」

「書記、紅葉知弦。いい質問だが、答えはノーだ。もっとも、私は高校生のころから様々な伝説を作ってきたからな。向こうは知っていたのかもしれない。」

「どんな高校生活送ってたんですか…。」

「私の話よりどうでもいい話だが…この生徒会、今日でお終しまいだ。解散。」

…私もやることやるとするか。…明日からが楽しみだ。

## 予告的なもの

それは、存在しないはずの物語。

「現守あらかみ高校からやってきました、水月鏡花です。」

死に別れた者達との再開

「じゃあ真儀瑠先生のことを『先輩』って呼んでもいいですか？」  
「…ッ。…お前が私を『先輩』と呼ぶなら…：私はお前を『後輩』と呼ぶことにしよう。」

「って、ええー！し、深螺にアリス！？ど、どうしてこんな所にいるの!？」

「それはこちらの台詞です、鏡花。あなたは死んだはずでは？」

「…ただいま、でいいのかな？鈴音。」

「…け、蛭…。」

待ち受ける困難

「あなたが元凶かしら？」

「いかにも。私の事は気軽に『女神』とでも呼んでくれ。」

「せーんぱい もっと楽しませよう？」

「耀の顔で喋るな…。その声で喚くな！」

そして物語はクライマックスへ…

「杉崎君。せつかくの劇なんだから派手な方がいいと思わない？」  
「き、鏡花。その姿は…？」

「さあ、本当の本当に最終決戦。全力でいくわよ！帰宅部、ファイ  
！」  
『オー！』

最後に明かされる碧陽学園に潜む驚愕の事実とは

水月鏡花の活躍を見逃すな！

マテリアルゴーストの一存

「…やっぱり、生きるって素晴らしいことね。」

同時上映

ぬこさんの休日

Coming soon!

## 予告的なもの（後書き）

おそらくこんな感じの展開＋生徒会メンバーとダラダラする、で進んでいきます。

…ぬこさんの休日はやりませんよ。

感想、指摘、要望、何でもお待ちしております。



## 第5話 会合する帰宅部ふもつふ

日時不明、某所にて

「次の仕事場所が決りました。」

「次から次へと仕事を持つてくるのは君の悪い癖だ。神無家当主が自ら動くのはいい加減やめないか？それにボクはもう少し休みたい。」

「そうしたいのは山々ですが、状況が状況ですのでここにここを出ます。準備を。」

「そんなに切迫した状況なのか？」

「はい。あの零音の事件に匹敵するかもしれません。」

「…それならば仕方がない。さつさと現場に行つて爪を剥がして舌を切断し関節を全て逆に折り曲げ性器を輪切りにして小学校に展示し抉り出した眼球を両親に送りつけて倒すか。」

「そういう事を言うのはやめなさいと何度言ったらわかるのですか、あなたは。あと、幽霊に両親はいないかと。…詳しい話は道中で話します。席はもう取りましたので。」

「…また飛行機か。…で、場所は？」

「私立碧陽学園です。」

「学校か。…フフ。数奇なものだね。また学校か。」

「その数奇なものを作り出した原因の一つは間違いなくあなたですが、準備はもういいんですか？」

「ああ、前の遠出の時から出してないからすぐに終わるさ。」

「…まあ、そうですね。…というわけで、雨森。またしばらく空けますので、留守を頼みましたよ。」

「はい、お気をつけて。深螺さん。」

「では、アリス。いきましようか。」

「ああ。そうするとしよう。」

## 女王との遭遇より2週間後

「ふう。やっと帰ってこれた…。」

この台詞は2週間ずっとカラオケボックスにいた、というわけではないので悪しからず。あの女王様は、特に戦うわけでもなく「今日は顔見せじゃ。」とか何とか言っただけでそのまま逃げられた。…見逃してもらったって言ったほうが正しいかもしれないけど。

あれの保有する霊力は半端じゃなかった。少なくとも見積もって私の5倍以上はあったのだから参ってしまう。

で、それからというものの夏休みなのをいいことに完全夜型生活に切り替えて連日のように見回りをやっているんだけど…。あ、ちなみに「カラオケボックスに出てきたんだから、町中きちんと探すべきでは？」という話があるかも知れないけどあいつの気配が学園から感じるのだから、ここを調べずして何処を調べるといっただろう。

いや、何処もない(反語)！…ご都合主義とか言っちゃいけない。見回りという言葉にも語弊がある。なにを考えたかあいつは「私に会いたくば我が配下を倒して見せよ。」という手紙を家の郵便受けに投函するという奇行に出たのだ。その夜学校に行ってみるとめでたく化け物と遭遇つと。それから二週間経ちまして、今に至る。

「以上、水月鏡花の報告でした。…はあ、いい加減疲れてきた…。」

それにしても、これまでの沈黙が嘘のように毎日つじやうじや出るわ出るわ。一日一体なら良いほうで今日なんかタカ、トラ、バックの三体を相手にする羽目になってしまった。

…誰よ！高校生にもなって特撮見てる奴は！

ノ

…誰かが遠くで挙手した気がするけど無視無視。

数週間後

夏休みも残すところ一週間となりました。みんな、宿題は終わったかな？…何という季節はずれな時候の挨拶。

…早速ですが交戦中です。本日のお相手は

「それにしても、つと、クマムシは反則でしょ！」

クマムシ

緩歩動物かんぽどうぶつの別称。緩歩動物は、緩歩動物門に属する動物の総称である。4対8脚のずんぐりとした脚でゆっくり歩き姿から緩歩動物、また形がクマに似ていることからクマムシ（英名はwater bears）と呼ばれている。耐久性にとてもすぐれ、乾燥：通常は体重の85%をしめる水分を0.05%まで減らし、極度の乾燥状態にも耐える。

温度：151の高温から、ほぼ絶対零度（0.0075ケルビン）の極低温まで耐える。

圧力：真空から75,000気圧の高圧まで耐える。「1」

放射線：高線量の紫外線、X線等の放射線に耐える。X線の致死線量は57万レントゲン。（ヒトの致死線量は500レントゲン）

、宇宙空間に直接さらされても10日間生存していたことが発見される。

など、まさに、強靱！無敵！最強！な生き物。

Wikipediaより（抜粋、一部力 バーマン）

これは「クマムシって無敵じゃね？でも小さいしな…。」みたいな感じの具現化だろうか。それにしてもどれだけ強く想ったんだろう。ここまで強くなるなんて。

さらりと言ったけど、段々とこの仕組みが分かってきた…気がする。きつかけは日によって強さに差がありすぎることに気付いたからで、碧陽学園の学生全員の無意識野に働きかけて色々調べられる装置を創って、…うん、創るの大変だった。何せ夏休みですから、学校にいないんですよ、学生が。何せ夏休みですから、学校にいないんですよ、学生が。大事なことなので二度言いました。学校を靈的触媒にしても効果薄いから、学校のホームページを媒体にして、その後また四苦八苦…。つと愚痴つてもしょうがない。えーと何の話だっけ？あ、そうだ。そしたら「強かったやつほど皆のイメージが確固としている」という法則に至ったわけだ。…それ何て聖杯戦争？と思ったり思わなかったり…。…あれは知名度だっけ？

「現状が辛いほど現実逃避したくなる。これ、社会の常識。」

いつまでも現実から目をそらしていても埒があかないので、いい加減現状の打開策を模索しよう。…それにしても…。

「本当にジリ貧ねこれ…。そもそも相性悪いのよね…。」

さっきから結構本気で殴る蹴るの暴行を加えているが、相手は全く

倒れる気配が無い。相手の攻撃は触手みたいなのを偶に伸ばしてくるだけだから避けるのは簡単なのだけど…。

さっきも言ったけど、本当に相性が悪いのだ。私が普通の霊能力者だったら相手のモチーフが何であれ、お札貼ったり祈禱したりすればダメージが与えられる。それに対して私、水月鏡花は霊体物質化能力のおかげで戦っても霊力の消費がほとんど無い代わりに、霊体のイメージまでも物質化させてしまう…まあ、つまり「鉄の体で出ている」というイメージの霊体ならば本当に鉄の体を持って物質化される、というわけ。

で、今回のクマムシ氏ですが、たぶん「どんな攻撃にも耐えられる」というイメージが付与されていると思われ、大変なことになっています。こっちが「何でも壊せる拳」創っても壊れなかったのを見ると、相当強固なイメージだと思われる。…うん。本当に最悪の相性だ。今まで戦ったことのないタイプだし。

「で、硬直状態が続いております、と。さてどうしたものか…。」

それから10分くらい硬直状態が続く。…『ブ』から始まって『チ』で終わる、某死神が出てくる作品だったら3話くらい出来るかもなあ、とまたもや少々現実逃避気味に考えていると、

「あ、っ痛!…ここに来て攻撃パターン変えるとかいやらしい。こっちは集中力がそろそろキツくなってきたというのに。」

そうやって集中し直す私に追い打ちをかけるように事態は急変する。

「…え、。新しい霊力を検知って。まさに泣きっ面蹴ったり。…ちよっと積んだかも…。」

もつとも、この後に及んでも逃げる気などないわけですが…って!?

「……この霊力って…まさか…。」

目の前で突然苦しみ始めるクマムシ。誰かの干渉を受けているみたいだ。

「こいつ普通の霊じゃないな。くそ、そう長くはもたないぞ。」  
「十分です。もう準備がすみましたので。…十、九」

碧陽学園の廊下に朗々と数を数える声が響く。…間違いない。

「三、二、一…零。」

カウントが終わるとクマムシは、すーっと色が薄くなり、そして消えた。…呆然としていた私も段々と現実味がましてきて…。

「って、ええー!し、深螺にアリス!?ど、どうしてこんな所にいるの!?」

思わずさげんでいた。

「それはこちらの台詞です、鏡花。あなたは死んだはずでは?」

「そうだぞ……。えーっと、水月鏡花。」

「…アリス、今言葉を濁したのが『式見螢』の名前が出てこなかったことに起因すしたら、私は激しくショックをかんじるのだけど。」

「いや、すまない。あまりにその姿が普通すぎて性別を間違いかけた。」

∴ 一段と状況が複雑になった気がする。

「…というわけなのよ。」

「あなたはまだ何も言っていないのですが。急に『というわけ』と言われましたも…。」

「あ、このネタ陽慈に一回使ってたな。しまった、この私とあろうものが二度ネタなんて…。」

「きちんと説明していただけますか？」

「あー、でも何かいいネタあったっけ…。…おお！三行でまとめるというネタが」

「何でもいいので早く説明してくださいっ！」

「……はい。」

このままではいつこつに話が進まず、我らが碧陽学園生徒会のような状態になりかねない…少しいいすぎかな？まあ、何はともあれ私がここにいる理由、今の化け物について等をかいつまんで説明。

「…なるほど。あなたの立ち位置、及びこの学校の状況は理解しました。それで、これからの方針はどうしますか？」

「取り敢えず夏休みの間はこの巡回は続けるとして、相手のリアクション待ち…かな？こつちから打ってでようにも…。」

「でようにも？」

「深螺、それにそこで暇そうにしているアリスも。今、異質な気配は感じる？」

「…そういえは何も感じませんね。アリス、あなたはどうですか？」  
「ボクにも分からないね。」

「そうなのよ。あの女王様は『学園の外に居るときは確かに校内に霊圧を感じるのに、いざ入るとまったく分からなくなる』のよ。」

私もこれには驚かされた。本当に学校の中では察知できずに、校門を一步でも出ると学園の方にきちんと強力な霊圧を感じるのだもの。

「先程敵を倒したから、というわけではないのですね?」

「ほう、これは興味深い。思わず新世界を創ってしまえそうだ。」

「まだその口癖直つて無かったの!?…まあ、そんな感じだから相手のリアクションを待つしかないわけ。もっとも…。」

「?」

「あ、いや。まだ確信ないから言わないでおくね。初期捜査を誤つたら最終的にフロツピーのデータを改竄することになりかねないから。」

「なんですか?その無駄な社会風刺は。…まあ、いいでしょう。他に何かありますか?」

他に…。あ、そうだ。これ言つといた方がいいわね。

「あー、そうそう。この学園に先輩いるから。」

二人の間に流れる微妙な空気。あれ?私、変なこと言った?

「…その先輩というのは真儀瑠紗鳥で間違いありませんか?」

「正解!」

「…紗鳥にはこの件について話しましたか?」

「あ、紗鳥って呼ぶようになったんだ。答えはいいえ。」

「何故?」

「先輩は先輩で何か都合があつて来たみたいだし、こっちはこっちで色々あるしね。挨拶はそれからでいいかなー、って。先輩もそう考えてるみたいだしね。」

「双方納得しているのならいいのですが…。それでは紗鳥が危険ではないですか?」

「…前にサリーに言った台詞なんだけどさ。『私、元々自信なんて微塵も無い人間だけど…大丈夫。守るべきものは、守る。今の私なら大丈夫って、確信している。』この考えを変えたつもりはないよ。」

…改めて口に出すと恥ずかしいからあまり聞かれたくないけど、あの頃も今も変わらない信念。これはそういうものだ。

「『自分が何者でも、どうなろうと、ただやる。』…うん、いい言葉よね。好きなラノベの台詞だけど…。私が式見螢であろうと水月鏡花であろうと、人間であろうとマテリアルゴーストであろうと、守るべきものは、守る。それが僕の答え - 真実 - ってね。」

「……。」

あれ？無反応？心無し顔が赤いような…？

「…私のもも」

「ん？」

「私のもも守ってくれるのですか？」

「もちろん。深螺だって大切な人には違いないしね。」

「…変わりましたね、鏡花、いえ、式見螢。」

「そうかな？…そうかも。私の方からは以上。で、深螺。明日から見廻り参加する？」

「…いえ。最初の遭遇がカラオケボックスだったそうなので、私たちはその周辺を探ろうかと。」

「それもそうね。せっかく頭数増えたいし、戦力的には…アリスって仕事ちゃんとするの？」

「王に対して失礼なやつだな。するに決まってるだろ。」

「いやだってこの作戦会議中ずっと遊んでたし。…何やってたの？」

「ゆう まだ。何故王であるこのボクが低俗な会議なんぞに参加し

なければならぬんだ？」

「…深螺？」

「いつもは私一人で依頼人と話をつけて戦闘時にはアリスと共に戦う、としていますので問題ありませんでした。やる時はやりますよ、アリスは。なかなかやる気になってくれませんが。」

「それはフォローないと思うんだけど…？まあ、深螺が何も言わないんだから大丈夫なんだろうけど。」

それから事務的な細かい話を二つ三つ話した後、深螺が

「こまめに連絡を取りたいので携帯のアドレスを教えてくださいませんか？」

なんて言ってきた。…携帯電話ね…。

「持っていないわよ。」

「…買いにいきなさい。」

「…何で？困ったこと無いけど？」

「いいから買いにいきなさい。最近では特撮の怪人ですら i o d touch を使うというのに。それと、『ドキッ！気になる異性とのアドレス交換（ポロリもあるよ！）』の機会を奪った罪は大きいです。さあ、明日にでも買いにいきなさい。」

「ポロリは無いとおも…分かった、分かったから。睨まないでって。」

「分かればいいの…。取り乱してしまいました。ですが謝りません。僧正の白玉すくいとも言いますしね。」

「ヨザル読んでるんだ…。変わったね、深螺。」

「そうでしょうか？…パンツじゃないから恥ずかしくないもん。」

「……………。せめて文脈は気にしようよ…。それにその台詞はキャラ崩壊もいいとこだと思うんだ。」

「間もなく日が昇りますね。それではそろそろ帰りますので。宿泊先と連絡先はこれです。くれぐれも携帯を買うこと。いいですね？アリス、帰りますよ。」

「ああ。」

そのままスタスタと行ってしまった。…それにしても…。

「アリスの台詞、少なすぎよね…。」

次の日。仕方がなく携帯を購入。英語で言うと purchase。…この案件が終わったら消えるつもりだからこういう物的証拠は残したくないのだけ…。…あれ？そういえば普通に戸籍とかあったけど消える時どうするんだろう？…気にしなくていいか。というか気にしたらダメな気がした。

それから毎晩戦って深螺たちと情報交換したり、別に夏休みを15498回繰り返したいわけでもないので宿題を無難にサツサとすましておいたり、特に取り上げることもないので割愛。

で8月31日になりました。

「あ、メール来た。…深螺から、って当たり前か。深螺にしか教えてないし。迷惑メールも…このアドレスの長さじゃ来ないでしょ。えーと、なにになに…。」

『明日から二学期が始まりますね。より一層の警戒を必要とすると思いますのが、無理をしないようにしてください。』

p.s. 「殺気」は「ころっけ」と読むと食べられそうな気がします。』

「…『彼は背後から殺気を感じた。』っていったら、きつといい句

いしたのよね……。気遣いはありがたいけど……。後半の蛇足っぷりが半端ない。何て下らないメールなんだろう、これは。」

そんなこんなで明日から2学期です。……防災の日か……。桜野先輩が何か防災の日にちなんだ行事やるって言ってたっけな……。……取り敢えず昼夜逆転現象を何とかしないと。

## 第7話 取材される水月鏡花

「ご機嫌麗しゅう、皆さん。」「どこかの会長と違って胸も大きい美少女」藤堂リリシアですわ。今回は新聞部部長であるわたくし自ら、最近噂になつている転校生、水月鏡花さんにインタビューを行いますよ。

こほん。それでは、インタビューを始めたいと思いますわ。

「…この時期に転校生だからインタビューっておかしくないですか？もう9月だから3ヶ月以上前ですよ、こつち来たの。あと転校生というなら中目黒君にはしないんですか？」

最近になつて漸く他学年の間で貴方の話題が上がり始めた、ということですよ。

「はあ、そうですか。」

まず、自己紹介からお願い致しますわ。

「みなさんこんにちは。キャメロン・ディアスです。…違うか。」

お笑い芸人のギャグは文章にすると間抜けになるので辞めたほうがいいですよ。

「そつみたいですね。」

では、改めてお願い致しますわ。

「水月鏡花、永遠の17歳です。」

…それは『おいおい』と言えばよろしいんですの？

「いえ、事実を言つたままでですよ。」

…？まあ、いいですよ。早速インタビューに入らせていただきます。

「よろしくお願いします。」

や、やりづらいですよわね。…こほん。転校初日に同性愛宣言をなされたそうですが、事の真相は？

「…そういえば藤堂先輩、いい身体付きしてますね。」

み、身の危険を感じたので次にいかせていただきますわ！

「えー。あわよくばスリーサイズを聞き出そうとしたのに。」  
どうやってその話に持っていくおつもりでしたの!?

「聞きたいんですか?」

結構ですわ!…本当にやりづらいですわね…。転校の理由をお聞きしてもよろしいですか?

「神様に命令されたから。」

…そういう不思議キャラで通そうとしているんですの?

「納得してくれないなら…霊長の守護者として呼ばれたから。」

あなたはその身に無限の剣を内包しているんですの!?

「藤堂先輩、結構分かりますね。モテないからですか?」

よ、余計なお世話ですわー!

冬場における鍋の汎用性に思いを馳せつつ、しばらくお待ちください。

では、続きへとまいりますわ。

「あ、無かったことにしましたね。」

お黙りなさい!まだ私を理解してくれる殿方との出会いがないだけです!

「杉崎君とかどうですか?なかなかの優良株だと思いますけど?本人もそう悪くは思っていないはずですよ。」

……。

「…うぶなんですわね、先輩。そんな分かりやすい反応されるとは思いませんでしたよ。」

…何かご趣味とかはおありで?

「あ、誤魔化しにかかった。」

そんなことはありませんわ!…そもそもあの方は競争率が…。

…。それで?何かおありかしら?

「(うわー、何この恋に悩む乙女の顔は。)そうですね…。趣味とかではないけど…羽毛布団にはこだわりがありますね。」

…はい？

「いや、だから、羽毛布団。羽毛布団党。」

「羽毛布団党！？」

「羽毛布団党は日本の将来を任せるに値する素晴らしいものです。

さあ、藤堂先輩も一緒に応援しましょう。」

え、遠慮しておきますわ。ジャーナリストたるもの如何なる団体にも属してはなりませんもの。

「じゃあスープレチャーハン党ですか？食い意地張ってるんですね。何の話をしているんですの！？あと人の話を聞いてくださいます！？」

「世界を二分割する二大政党の話ですよ？」

…インタビューが始まってから今まで、貴方という人間が全く計れないでいるのですが。

「私はそんな大したもんじゃないです。手の届く範囲にいる大切な人を守るうと決意した、ただの永遠の17歳ですよ。」

…杉崎鍵みたいなことを言いますのね。

「惚れました？」

そんなわけがありますか！次いきますわよ！

「？何で怒っているんですか？」

本当に不思議そうに首をかしげないでくださいます！？

「あはは、冗談ですよ。メキシカンジョークです。」

だからメキシカンジョークってなんなんですかの！？…こほん。休日  
は普段、どのようなことをなされているんですの？

「休日は公園で…」

公園で？

「人間観察を。」

歪んでますわね。

「吊し上げ精神をモットーにしている藤堂先輩よりはマシだと思いませんが。」

好みのタイプを聞いてもよろしいかしら？

「自分が死んでも、十日程したらさっさと忘れて、前へ向かおうと

決意しちゃう、芯の強い女の子」

ビックリするくらいにピンポイントですわね。そんな人いるんですの？

「あとは：大切な人のためなら尊敬している姉の制止も聞かずに諸悪の根源に立ち向かっちゃう巫女さん、とかも好きですね。」

「やっぱりピンポイントすぎますわ！」

「こうだから好き、というか好きになった人がこうだった、ってだけの話ですけどね。」

：「あら、真儀瑠先生ではありませんの。どうしたのですか？そんなに青筋を立てて。」

「後輩、後で職員室に來い。不純同性交遊について話がある。」

行ってしまいましたたわね。そういえば貴方と真儀瑠先生との関係を聞きたがる人もたくさんいるのですが：どうなさいましたか？

「：間違いない。後で：全部終わったあとに殺される：。」

「だ、大丈夫ですか？」

「鬼に金棒」っていうけど、金棒持ったら誰でも強くなるのでは？という疑問を抱きながら、しばらくお待ちください。

「ありがとうございます。お陰で落ち着きました。先輩との関係は先輩と後輩です。」

「そ、そうですか。あまり詳しく聞かない方が良さそうですわね。」

「ええ。そうしていただけると嬉しいです。というかそうしてください。」

「では、最後の質問になりますが：碧陽学園に来てよかったと思っていますでしょうか。」

「：ええ。それは断言できます。」

「それは良かったですわ。」

「藤堂先輩もそう思っていれでしょう？」

「当然ですわ！こんなに素晴らしい学校は他にないですもの。」

「ええ、本当に。」

…まったく。まともな取材にならなかったじゃありませんの。

「私は藤堂先輩と話せて楽しかったんですけどね。」

……。

「もしかして先輩、友達も少ないですか？」

…最後に何か一言、お願いしますわ。

「あ、否定しないんだ。」

お・ね・が・い・し・ま・す・わ！

「おお怖。…そうですね…。15,000PVありがとう、とかどうでしょう。」

最後までよく分からない人ですわね。

「そうですねうか？」

以上でインタビューを終わりますわ。

これからもわたくし達新聞部の活躍にご期待…なさって欲しいのですが、今後出番はあるのかしら。

## 第8話 仕事する生徒会 + 1

「碧陽学園生徒会に同じ攻撃は二度も通じない。今やこれは常識なのよ!」

いつものように桜野先輩がどこかで聞いたことのあるようなフレーズを言っている。念の為言っておくと、まだ椎名姉妹は生徒会室に来ていない。二人とも掃除当番があるらしい。

「嘆願書を『攻撃』というのはさすがに言い過ぎだと思えますよ会長。」

「じゃあ杉崎は今までの滅茶苦茶な嘆願書を全部受け入れるっていうの!？」

「いや、そうは言いませんが…。」

「だったら戦いだよ。やるかやられるかの。十人生徒会との。」

「ありましたね、そんな話も…。」

なにやら杉崎君と桜野先輩が言い合っているが私はそれよりも確認しなければならぬことがある。

「あのー、私はここにいていいんでしょうか？」

「?なんで？」

「いえ、ですから…。」

今まで生徒会室に来たときは仕事なんて全くせず…こう言ったら桜野先輩は「ちゃ、ちゃんとやってるわよ?」と言うかもしれないが…の状態だったので気兼ね無く居られたのだが、如何せん今日は真面目に仕事をやると言っているのだ。しかも嘆願書を一般生徒が見て良いものなのか…。

「…と思うんですけど。」

「あー、それならね。私たち来年は卒業しているじゃない？」

「……。おそろくは。」

「うん、このままだとちょっと厳し……。って！そういう話じゃなくて！鏡花はほぼ間違いないく来年度の生徒会役員になるから、経験積ませといてもいいんじゃないか、って。真儀瑠先生が。」

「紅葉先輩？」

「アカちゃんの言ってることで間違いないわよ。」

「その話は噂程度には聞いてましたが…。私の意思是…？」

「あれ？嫌なの？」

「嫌ではないですけど…。」

…さすが先輩だ。何も話して無いのに、こちらのことをよく理解している。そもそも私は本来ここにいるべきではない、既に死んだマテリアルゴーストなわけで。この問題解決したら関わった人たちの記憶改変してもらって消えてしまうつもりでいるのを完璧に見抜かれた。未だに『杉崎君』、『桜野先輩』、『紅葉先輩』と呼んでいるのだから必要以上に親しくならないようにしているわけだし。それにしても随分と細かい手回しだ…。もしかしたら深螺から「何かそちらで手をうつてください。」的なことを言われたのだろうか？そしてやっぱり思う。私の意思はどこいった、と。

「（…ま、難しい事考えるのやめよ。決着がついたらでいいよね、後のことなんて。）」

「何か言ったか？」

「いえ、別に。何事も経験ですよねー、と思っただけよ。」

ガチャ

「うーす。」

「こんにちはです。」

「よし！姉妹も来たし、パパつと全面戦争だよ！」

「お、戦争だつて！？」

「戦争…ですか？」

「何で深夏はそんなに嬉そ…うなのはすぐ分かったから言わなくていいや。」

みんなで嘆願書を閲覧中。杉崎君は放送で呼び出されたので現在ここにはおりません。決してツツコミが二人いるとやりづらい、などという大人の都合ではございません。

「これ最後に見たのって私が来る前ですよね？二心にも書いてありましたけど。」

「そうね。かれこれ3ヶ月くらい見ていないかしら。」

「それにしても…すごい量ですね。」

「しかもきちんとしたものが無いんだからやってられないわよね…。」

「紅葉先輩のには何が書いてありました？」

「例えば…『野球部 雲高校にいるという伝説の名将を監督に雇いましょう。』」

「ほ、星 徹さんですか…。大リーグボール養成ギブス付けられるだけだと思いますが。」

しかもそれを勝手に外したら、ちやぶ台返しを食らうというマダム・リー、…理不尽な話があったり。

「『サッカー部 翼をください。』」

「前のバトミントン部のやつと一字一句同じなのに表している内容が違いすぎる！みさくんもいっしょに欲しいんだろうね。」

「『ボウリング部 ラウンド ンのCMで使われる人たちは、どうしてあんな面々なのでしょうか？』」  
「知りませんよそんなこと！確かに巷では『あのCMは芸人の墓場だ』って言われてるけども！あと絶対に部活動と関係ないよね！」  
「『フェンシング部 全身白タイツでモ モジ君みたくで恥ずかしいです。何かもつとナウいのを。』」  
「それが恥ずかしいならもう辞めちゃえよフェンシング！あとナウイとか言ってるやつが未だにいることに喫驚したわ！むしろそっちの方が恥ずかしいわよね！？」

「あたしが見てるのも結構ヒドいもんだぜ。」

「あ、深夏。どんなのがあったの？」

「あたしは文化系のやつをみてただけだよ…。『新聞部 ビルママに行ってきます。』」

「うん、やっぱりただの学校新聞とは思えない提案だ。…ビルママって言うてるのは個人的には好きだけど。」

…そもそも藤堂先輩なら家のコネを使えば大抵のことはできると思うんだけど…。

「『ミステリー研究会 今度のは2000万円可能です。どうか。

』」  
「金額の問題じゃないよね！」

「お、杉崎君。お疲れさま。そして早々に突っ込み参戦だね。はい。」

「…えーっと、この手は何かな、鏡花？」

「突っ込みのバトン。深夏、ここから先は杉崎君が代わりにツッコミいれるから。」

「『コンピューター研究部 真儀瑠先生を早く引き取ってください。

』」

「最近見ないと思ったたらそんなとこにいたんだ！」

「『文学部』」

「ちよつと待った。…あれ？うちに文学部なんてあったっけ？」

「ああ。結構前からあるみたいだな。」

「じゃあ生徒会の一存シリーズ、文学部に書いてもらえば俺すごい楽なんじゃ…。」

「……………」

「『え？この後に及んで何言ってるんだこいつ』みたいな目で見ないでください。つらいです。」

「『ゲーム部 セキュリティをもつと強固なものにしたいです。』」

『……………真冬ちゃん(怒)』

「み、みなさん落ち着いてください。ゲーム部はこれでも意外なところで役立っているのです。」

「ほう、例えば？」

「…水月先輩が真儀瑠先生みたいです。…例えば…優秀なメタモンを皆さんに貸し出すとか。」

「ああー、便利だね。性格がようきで、こうげきとすばやさVのとかがいると。」

「何で納得してるの鏡花!？」

「いや、だって大変なのよ？めざパ粘らないかぎり速くしとかないと。例えば、私のガリアスなんてようきだけど個体値が29だったから、相手が同族の最速仕様だったら間違いない勝てないのよ。」

まあ、たまにゆうかんすばやさ逆Vのドイドンをトリパで使ったり、みがきあ使ったりもするから一概に早い方がいいとは言えないけど。」

「そんな細かいポケモンの話はいいから！あと真冬ちゃん！そんな『さすが水月先輩、分かってます！』的に顔を輝かせない！」

「あとモンスンのキークエストを手伝ったり…。」

「一番初めのデータは異常震域、友達にやってもらったな…。」

「もう二人とも黙ってよう。そしてやっぱり潰そう。ゲーム部。」

「し、失礼ですよ先輩！ゲーム部より潰すべきクラブはもつとたくさんありますよ！」

「ほう、例えば？」

「…気に入ったんですかその台詞。」

「うん。かーなーりハマった。」

「そ、そうですね…。真冬が読んでいたものだってなかなか酷かったですよ。まずはそれを聞いてください。」

「ほう、た」

「『皇帝部 他の皇帝部と試合がしたいです。』」

「なんだよ皇帝部って！？校庭とかでもなくて!？」

「『皇帝部。主活動目的、独立国家・東京帝国の国政』」

「国政!?!っていつか東京帝国ってどこさ？」

「…先輩、それはフリですか？」

「…?」

「東京帝国とは、北西は奥多摩から、東は江戸川区、南は伊豆・小笠原諸島にまで広がる総面積2187.58平方km、総人口1300万人強の、独立国家ですよ？」

「それは東京都の説明なんじゃないかな。」

「次いきますね。『非公式新聞部 さあ、ネタは拳がっているんだとつと吐きたまえ。』」

「リリシアさんですら手に負えないのに非公式まであるの!?!」

「他にも『革命部 部員が勝手に銀行の頭取になりました。』」

「状況が全く掴めないのですが!?!どうしてそうなった!」

「『革命部。主活動目的、その名のとおりに革命を敢行しちゃう部！最終目標はなんと「建国」！私たちの国を創って、部長が女王様として君臨します！これであなただも大臣だ!』」

「…真冬ちゃん。」

「『オレ部 宝が欲しい。』」

「…真冬ちゃん、そろそろ俺、突っ込みに限界を感じてきたよ…。」

「『オレ部。主活動目的、俺の部活だからオレ部だ。文句あるか?』」

…だそうです。」

「……………。何か、私が悪かったです。」

「他にも『隣人部』さん等々色々な部活からきてますよ。」

「いよいよ魔窟だな、碧陽学園。」

「…元ネタが分かる人何人いるのかしら？」

「水月先輩どうかしましたか？」

「ん？ああ…今年の隠し芸大会は何をしようかな…と。」

「毎年そんなことやってるんだ！そして今考えなくてもいいんじゃないかな！」

「ちなみに去年は『誰にも見えない竹刀を虚空から取り出す。』っていつのをやったわね。」

「一瞬だけ凄いと思ったけど、よくよく考えたらただのハッターだよね、それ！」

「前回も名前は挙がってましたけど、田中部とかセレ部とかは間違はなく先に潰すべき対象だと真冬は主張しますっ！」

「それはあの時に結論でなかったっけ…？」

「先送りにするという結論でした。…ここは真冬たち生徒会で碧陽学園を仕分けするべきだと主張します！この学園には無駄が多すぎるのです！」

「おお！いつになく真冬がアツくなっているぞ！」

「ゲーム部否定されたのがそんなに納得いかなかったのかしらね。」

「真冬ちゃん一人で盛り上がってる人がいますが。桜野先輩、どうしますか？」

「……………」

「やりましょう。仕分け人になってやるのです。」

「……………」

『はい？』

「…くーぐる…しゅらいばー…。」

桜野先輩が夢の世界に落ちてました。

「いやいやいや！何で夢の中でドイツ語話してるんだよ会長さんは！」

「しかもボールペンって、アカちゃん…。」

「…んあ？…わ、私は寝てなんかいないんだからね！？」

『…はあ。』

それから何だかんだとありまして。

「いいわね！やりましょう、仕分け・イン・碧陽！…フフフ。誰がこの学校をトップか思い知らせてやる…。」

と桜野先輩が『その顔はヒロインとしてどうかと思うような』笑みを浮かべながらも賛成したので、やることになりましたよ、仕分け… 本家みたいに仕分けた後も名前変えて存続、みたいな感じにならないといいんだけど。

まさかのつづく

さて、今回のマテリアルゴーストの一存は…。

碧陽学園を仕分けることになった生徒会役員。

ぷろろーぐ以来出番の無かったあの姉弟や、当初のプロットでは登場する予定の無かった新聞部部长や、そもそも存在を忘れていた軽くBLの気がある転校生etc. を巻き込んで色んなものに物申す！  
次回、マテリアルゴーストの一存第9話 「仕分けする生徒会+」  
お楽しみに〜。

## 第9話 仕分けする生徒会+5

「…で、『生徒会の意見だけじゃ偏りが出るから、一般生徒からも何人が連れてこよう。』って話になって、どうして2年B組の人ばかりなの!?あとリリシアは誰も呼んでないよ!」

桜野先輩がいつもの名言すら忘れて叫んだ。…うん確かにこれは…。

「ここが深夏の…。」

「ここが杉崎君の…。」

何やら感動しているらしいうちのクラスの男二人。

「あいつ等が杉崎の…。」

生徒会役員をまるで親の仇であるかのように、視線で人を殺せるか検証しているような眼で睨んでいるアイドル一人。

「おーっほっほっほっほっ!」

無駄に高笑いしているお嬢様が一人。…断言しよう、絶対に人選ミスだ。

「そういう会長は誰も連れてきて無いじゃないですか。知弦さん、どうしたんですか?」

「ええ、アカちゃんが誘ったのだけど…。私が後ろでニコニコ笑っていたら皆逃げてしまっただけ。」

「何クラスメイト脅してるんですか知弦さん!」

「脅したつもりはないのだけど…。こう、『私のアカちゃんに何かしてみる』と思ったら、ね。」

「立派に脅してるじゃないですか！そりゃあ、誰もついて来ませんよ。」

「真冬ちゃんは？あのクラスなら秋峰くんとか一部例外を除いて、間違いなく全員ついて来ようとしたと思うんだけど？」

「はい、確かに水月先輩が言ったような事態になったのですが…何故か誰も来れないことになりました。」

「…うん、何となく分かったからいいや。」

誰が真冬ちゃんについて行くかで血で血を洗う争いに発展して全滅したんだろうな。すごいクラスだ。

「あ、自己紹介とかやりますか？面識無いですよね？」

「さつき済ませたから大丈夫よ。じゃ、やる気が最初から最低値な気がするけど始めますか。」

「というわけで。ここに事前アンケートによる『これ、要らないんじゃない？』ランキング、略してイラキンがあります。」

「いつやったか、などという無粋な質問はNGですね分かります。」

「では早速、第五位から。」

「その前にちょっとよろしいかしら？」

「えー、リリシアに喋らせたくないー。」

「そんな態度を取るからお子様だと言われるのですわよ？」

「う…。…リリシアさん。お願いします。」

「はい、よくできました。頭などでしてあげますわ。」

「でへへ…。って、だ・か・ら！」

「…ツチ。」

「ち、知弦さん？今、あまりヒロインからは聞こえてはいけない音が聞こえた気がするのですが…。」

「誰も嫉妬で腸が煮え練りかえっている、なんてことはないから安心していいわよキー君。」

「わざわざ言うから余計に心配になったんですけど!？」

「…ツチ。」

「…ガクガク」

「…発言してよろしいかしら?」

「いいんじゃないですか?」

「では遠慮なく…。学内の無駄をとやかく言う前にまずは自分たちを見直すべきではなくて?」

…あ、タブーワード。

「…あれ?私の耳がおかしくなったのかなー?今、生徒会が無駄だつて言われた気がするんだけど?」

「それ以外の意味に聞こえたのならあなたの耳か頭に異常があるでしょうね。」

「……………。リリシア、アウトー。」

ポチッ、ガタッ、ヒュー。

「こ、これは何なんですのー!」

『……………。はい?』

状況説明。桜野先輩が何処から取り出したスイッチを押す。藤堂先輩の足元が開く。そのまま落下。

「ふふふ。我がホームグラウンドに来ておきながら暴言を吐くとは身のほど知らずな奴よ…………。」

「…会長。いつの間にこんなもの作ったんですか?」

「夏休み中に。」

「何処からこのお金が…つてまさか会長!？」

「…ふーふーふーん」

「アカちゃん。そんな吹けもしない口笛で騙されるのはキー君ぐらいよ。」

「ほ、ほらさつさと始めようよ！」

『……はあ。』

嘆息。…因みに藤堂先輩はきちんと救出しましたよ。…なぜか私が

「では気を取り直して第五位から…といきたい所だけど時間がないから第三位からにしましょう。」

「何で？まだまだ時間はあるよ？」

「いえ、こつちじゃなくて、あつちで。」

「？」

「紅葉先輩、メタな発言は止めましょう。」

あと時間がないわけじゃなくて五つも浮かばなかったただけだし…と、こつちの方がメタね。気を付けないと。

「気を取り直して第三位は…『新聞部』ね。」

「な！何ですって！」

リリシアさんは酷くご立腹のようです。…そりゃそうよね。今日したことといえば、フリーフォールしたただけだものね。それでこの仕打ち。…うん、不憫すぎる。

「なぜ、わが新聞部がそのように言われているのですか！」

「実際、あの新聞は賛否両論あるからな。」

「生徒会の意見は…明らかに私情が入るから置いとくとして。その路傍の石1、3、何か意見あるか？」

「…杉崎。路傍の石って私達のことかしら？呼んでおいて何でそんなこと言われなきゃならないのよ！」

「このメンバーに遠慮はいらんから積極的に発言してくれないかな？」

「す、杉崎君は、ボクを求めているんだね？」

「とても嫌な風に言い換えられたが、まあ、そういうことだ。」

「……ぼ。」

「おいこら、何故にそこで頬を染めつつ露骨に『ぼ』とか言っているんだ？」

「……立つたわね、フラグが。」

「何て不穏なことを呟いているんだ鏡花！そして真冬ちゃん！鼻息を荒くしながらメモを取るのには止めてくれないかな！」

「杉崎先輩。」

「……何？真冬ちゃん。」

「ごちそうさまです。」

「うわああああああん！」

「あ、杉崎が壊れた。」

「……何時になつたら話が進みますの？」

「あ、そうだった。でスペース姉弟に中目黒君。新聞部の新聞って毎回読んでる？」

「まあ、あれだけ大きければ嫌でも目につくわよね……。後スペース姉弟って呼ばないでくれるかしら？」

「内容に関しては……あんまり個人的な内容を辞めてもっと学校のネタを増やした方がいいと思う。あくまで個人的な意見だけど。後スペース姉弟って呼ぶな。」

「……成る程ね。で、中目黒君は？」

「……はふう。」

ああ、さっきのやりとりでトリップしている。……にしても男の子で『はふう』って。さっきの『ぼ』もだけど、この子は生まれてくる性別を間違えたんじゃないだろうか。……私に性別云々は言われたくないかもしれないけど。

「……ということだそうです。まあ、個人的な内容云々は確かにあれで

すけど、その辺は藤堂先輩も分かってますよね？」

「当然ですわ！それを踏まえた上でわたくし達新聞部はさらし上げ精神をモットーに日々新聞制作に励んでいるのです！」

「まあ、あまりにも内容があれだったら生徒会から注意がいくと思っ  
ういますんで、敵を作らないように頑張ってください、って方針で  
私はいいと思うんですけど。そういえば紅葉先輩。生徒はどんな理  
由で新聞部が要らないと言っているんですか？…って何やってるん  
ですか？」

「あら、気付いちやっただかしら？」

「さつきから私しか喋ってないとおもったら…。」

そこには餌付けされているかのごとくじゃが　こを紅葉先輩から与  
えられている桜野先輩とそれを苦笑混じりに見守っている椎名姉妹  
の姿がありました。

「何やってるんですか？」

「アカちゃんが暇そうにしていたからつい、ね。」

「…はあ。」

「で、さっきの質問なのだけど…実はそんなに反対なかったのよ。」

「え？じゃあどうして…。あ…もしかして一位がぶっ干切りだっ  
たりしますか？」

「ええ、その通りよ。」

「…私、これからの展開が手に取るように分かるんですけど。」

「ふふふ。どうかしらね。」

「で、さつきも聞きましたけど新聞部は保留、でいいですよね？」

「ええ、そうね。…でいいわよね？アカちゃん。」

「…うん？何かよく分かんないけど、分かった。」

「何なんですの？その投げ遣りな態度は？」

「続きまして、第二位は…『優良枠』、ね。」

「な、なんだと！？」

『あー、確かに。』

「全員に全力で同意された！？いや、『優良枠』は絶対必要ですつて！主に俺がハーレムを維持するために！」

「そんな発言するからだ！」

「まったく深夏の言う通りだな。」

「そうよ！そんなものがなければ私はもっと杉崎と一緒にいられたのよ！」

「巡はそんなに時間をかけて俺を苛めたいのか！」

「球筋に出てるぜ！」

「何で私の発言はネガティブにしかとられないのかしらね！？あと鏡花は急にどうしたの？」

「いや、最近出たもんだから、つい。」

「あー、P P版ね。」

「そうそう。」

「こら、杉崎！そんな話は後にしなさい！」

『ええー。』

「鏡花まで何でそんな残念そうな顔してるのよ…。」

「キー君もアカちゃんも聞いてないし、このままじゃ決まらなそうだから三人だけで決めちゃいましょう。『優良枠』廃止に反対の人は拳手をお願いします。」

『はい。』

「賛成多数で『優良枠』は廃止の方向で、よろしいですか。」

『はい。』

「ちよつと待った！」

「あらキー君、どうしたのかしら？」

「そうだぞ。どうしたんだ？鍵。こっちは真面目に会議中なんだぞ。」

「そうですよ。杉崎先輩は水月先輩と二人でリバスでもクラドでも好きなだけ話してればいいんです。まさに鍵っ子ですね。」

「誠に申し訳ありませんでした。」

「即座に思考を切り替えてジャンピング土下座をするあたり、さすが杉崎君よね。」

「といたしますか、そもそも、この『優良枠』は生徒会役員選抜が人気投票で決まるから妥協点として学校が作ったものでして！それを要らないとはどういうことですか！」

「この制度が採用されてからキー君が二例目に当たるのだけど…。」

「へえ、雪海さんのところから一回も無かったんですね。」

「なかなか利用されないし、久しぶりに利用されたと思ったら…  
ねえ。」

『ねえ。』

「こんな時だけ息ピッタリですねあなた達！」

「まあ、これも実はそんなに多くの人が言った訳でもないんだけどね。まあ、取り敢えず今年度いっぱい様子をみよう、ということみたいね。頑張ってるね、キー君。」

「つまり今年度いっぱい俺のハーレムは維持できる、ということですね。」

「今から議題にしてもいいのだけど？今の発言の証人もいるしね。」

「誠心誠意、生徒会副会長を全うさせていただきます。」

「何か杉崎つてば土下座してばっかね…。やっぱりDMなのかしら？」

「いや、その話は前もしたたる、姉貴。」

「さて問題の第一位なのだけど…。実に9割以上の人が『これは必要ない』と判断したのよ。」

「いったいそれは何なんですか知弦さん！」

「…杉崎君。あんまりテンション上げない方がいいわよ。」

「へ？」

「第一位、『杉崎鍵』。」

「俺かあああああ！」

「ほら、やっぱり。」

「よし。じゃあ、今後我が碧陽学園は『杉崎鍵』を廃止する方針で。」

みんなそれでいいわよね。」

『異議無し。』

「議論の余地すら与えられないんですか！？少しは身内を庇うとかいう話になりましようよ！」

「そうですね！杉崎はこの学園に必要な存在です！」

「め、巡。実はお前、いいやつだったんだな…。」

「杉崎が学校からいなくなったなら」

「巡の専属マネージャーに出来るかもよ？」

「異議無し。」

「さっきの俺の感動を返してくれませんかねえ！しかもマネージャーって、お前はどこまで俺のことが嫌いなんだ！」

「どうして今の発言でそうなるのよ！」

「マネージャーってことはお前のストレスの捌け口になるんだろ？俺はサンドバッグなんだろう？」

「何でこの男は私の発言になるとネガティブにしか捉えられないのかしらね！」

「それよりもいいの？桜野先輩が今回の出番の少なさを八つ当たりのために何か色々やってるけど？」

「会長！ちよつとま」

「ポチツとな。」

がちゃ

「今度は俺かああああー！」

本日二度目の登場。…きつと一発ネタよね。こんなの毎回使ってたから細かすぎて分からないものになりそうだし。…それにしても…。

「…どうやってオチつけましよう、これ？」

というわけで今回のオチ。その後、杉崎君の身を削った説得（単に殴られていただけともいう）の結果、一先ず様子見、ということでは落ち着いた。

「私は生徒副会長として間違っておりまして。今後は誠心誠意、生徒のために尽くさせていただく所存でございます。」

「うん、何かどこかで聞いたことある気がするフレーズだけど気にしないことにすりわ。これで今日は解散！」

しかし私たちは、翌日、驚くべき光景を目にする。

翌日

「はっはっは。諸君、ごきげんよう。」

「…ついに鍵が壊れたか。」

「何を言っているんだい、深夏。私は気付いたのだよ。」

「何に。」

「人は未来を見て生きていかなければならない。なぜなら人の目は前にしかついていないからさっ！」

いつもの5割増しで、強烈な個性（好意的解釈）を持った杉崎君がそこにはいました。

「…おい、鍵。」

「なんだい、深夏。」

「オチまで似せてるんじゃないやねえー！」

「ひでぶっ！」

渾身の右ストレートが炸裂。…南無。

おまけ

「あれ？ボクは今まで何を…？って、もう夜中！？…さすが杉崎君だよ。」

## 第10話 シリアスする水月鏡花

えー、ただ今、いつもの見回り中です。触れてなかっただけでずっと続けていたのですよ、実は。

「何やら話し声が聞こえてきたわね。こんな時間に誰が……と自分のことを完全に柵に上げたことを思いながら近づいていく。……ここは、生徒会室？恐る恐る中を覗いてみると

「御託はいい。さつたと始めろよ」

「目上の者に対する口の利き方が、なってないな」

杉崎君と……知らないおじさんが絶賛修羅場中です。うん、どうしろと。

助太刀に行くべきか否か。……そりゃ、行かない方がいいわよね。暴力沙汰じゃなくて交渉なんだから。

それに杉崎君の表情を見ているかぎり、何か策があるみたいだし……。下手に干渉するのはダメよね……。っと今『神の視聴区域』って単語聞こえなかったかしら？杉崎君もこれでその単語を知ったか……。

何て考えているとおじさんがスゴいことを言い出した。

「では、退学手続き、早めにお願ひするよ、杉崎鍵君」

え、杉崎君退学するの？……って、ヤバッ。こっち来る！直

感だけどバレたらヤバいつ！

「在れっ！」

出来る限り早く「姿を隠す髪飾り」を作成。何とか知らないおじさん 最後まで名前が分からなかった をやりすこす。

「分かってるよ……ちくしょうめ」

乾ききつた杉崎君の声が聞こえた。が、私は話かけることはしなかった。今話かけたら、私が盗み聞きしていたことが丸分かりで、杉崎君に更なる負担をかけることになりかねない、というのものが……。

「……これはこれは。何のご用でしょうか、女神様」

後ろで突如現れた強烈な気配に対処する必要があったからだ。

……そう、これはいつもの雑魚なんかじゃなく、女神の本体だ……あの夏の日以来感じなかった直のプレッシャーね。

「女神様？何を言っているんですか、センパイ？犬のニャー君も意味が分からない』と断言していますよ」

瞬間、背筋に今まで感じたことのない悪寒が走った。

「……やっていいことと悪いことがあることをご存じでしょうか……」

「初対面の人にパフェたかったりするのはいけないことですよね。ニャー君も『いけないことだ』と断言しています」

……落ち着くんだ、今ここで理性を失っちゃいけない……。

「……ここだと危ないですね。屋上にでも行きましようか」

自分でもビックリするくらい平坦な声が出た。感情を押し殺した声の手本みたいな声ね。

「式見センパイのえっちー。そこまで行ってなにするつもりですか？ニャー君も『ムツツリスケベだ』と断言しています」

その言葉には答えず、黙って踵を返し、屋上へ向かう。

……さーて、こっちの物語もクライマックスに近づいて来ましたかね。

「で、わざわざ何の御用でしょうか？」

「あれ？この容姿には触れないんですか？犬のニャーく」

「御託はいいからさっさと話してくれない？」

謀らずともさっきの杉崎君と同じ台詞回しで先を促す。

「そーですね。まずはさっきの杉崎センパイ……でしたか？は文化祭前日に一騒ぎ起こすみたいですよ？」

……意図が全く分からない。嘘であろうと本当であろうとメリットもデメリットもこいつには無いんじゃない？

「それを私に言ってどうするの」

うーん、そうですねー。と首を傾げる。……その一挙手一頭足がああ娘に似ていて神経を逆撫でる。

「どうもしませんよ？ただ……私もそこで動くので覚悟しといてください、という話です」

「!？」

「ああ、その驚愕に満ちた顔が見たかったんですよ。犬のニャー君も『大満足です』と断言しています」

「……それを信じるのも？」

「嘘についてどうするんですか？」

「……まあ、そうよね」

正面からぶつかっただけならまず勝てない相手。いくら正体に検討が付きはじめているとはいえ、まあ、現状じゃ勝てないだろう。

わざわざ畏にはめる意味が無い。

鵜呑みにするつもりもないが本当にこいつはただ私の反応が見たかっただけなんだろう。

「それとさつきから疑問だったんですけど」

女神はさらに続けてきた。

「さつきから何をイライラしているんですか？そんなに日向耀の姿はイヤですか？」

こいつ、よくまあぬけぬけと言ってくれるな。

「お前なら知っているだろ。僕は『死』を侮辱されるのが嫌いなんだ」

………口調が式見蛸になってるな。どうやら感情的になると戻

るらしい。新しい発見だ。っとそんなこと考えている場合じゃなく落ちつかなければ。

「…………『死』を侮辱、ですか。なかなか感性を求める話ですね。

……………ですが、センパイもそうなんじゃないんですか？」

「あんまりふざけたことを言わないでくれるか？」

「まあ、そのことは置いておきますが。一つおもしろい話を」

……………こつという場面での『おもしろい話』というのは大抵碌で

もないものだというのは自明だ。言わせないようにしたかったが、

それよりも早く女神は口を開いた。

「日向耀の死はあまりにもタイミングが良すぎたと思いませんか？」

何を馬鹿なことを、と鼻で笑うべき場面だろう。しかし僕にはそれが出来なかった。

「式見センパイは知ってますよね？ 霊体が間接的に人に作用できることを」

……………もちろん知っている。霊体物質化能力が異物として世界に見なされていた時にあった『死にたがり』だってその話だし、初めて入院した時に 加奈子の騒動があった時だ 重病人に精神干渉していた霊だっていた。

「そう、入院の時です。あの時病院に憑いていた死神は重病人に対して精神干渉をしていました。……………そこで問題です。その死神より強大な干渉力を持っていた者が出来ない道理があるでしょうか？」

得意げに奴は続ける。

「答えは勿論N。例外はありません。……………この場合誰がどの立場なのかは説明するまでもありませんよね」

奴はあくまで純粋な笑みを絶やさず話す。

「事実、タナトスを名乗っていた頃のアリスは健康な身体を持つ者に対し、命令を下していました。これだけ条件がそろって疑われないのはおかしいと思いませんか？」

さて、と言ってそのまま続ける。

「ここまでの推測はセンパイだっしてしましたよね？でも未だに確認をしようとする。私（耀）の願望は違ったかもしれないのにそれを無視して殺した人を詰問すらしない。では最初の質問に戻ります」

『死』を侮辱しているのは誰ですか？

「……………言いたいことはそれだけかしら？」

その問いに対し、私は答えを返してやることにする。

「そんな事は絶対にあり得ないからよ。確認するまでもない」

私の感想は「何だそんな話か」程度に止まっていた。てっきりこいつが犯人というのかと思っていたから拍子抜けだった。

「理由を聞いてもいいですか？」

「嫌。……………じゃ話が進まないわね。ま、信頼云々言っただって納得しないでしょうから一つ客観的な事実を言ってあげる。アリスはそ

「ここまで頭の回る娘じゃないわよ」

「某所にて」

「ハクシヨンツ」

「どうしました、アリス？風邪でも引きましたか？季節の変わり目だから気を付けろと言ったじゃないですか」

「いや、これは誰かがボクの噂をしているに違いない。そいつの眼球を抉り出さなくなるような噂を」

「……………何度言ったらその口調は治るのでしょうか？」

「……………そんな理由ですか？」

「そうよ、そんな理由。だからね……………」

今まで我慢していたものを一気に解き放つ。……………ま、パンチで始まる交渉術もあるんだし、少しくらい、ね。

「耀の声で話すな……………。その声で喚くな！」

渾身の右ストレートが相手に刺さる。

「……………ここで主を倒してしまう訳にはいかぬからな。決戦は先ほど言った通り。その時、私は完全なものなる……………！」

そんな捨て台詞を残して『女神』は去っていった。……………今の言葉について考えてみよう。去り際の台詞はだいたい伏線だし。こっちには何か意味があると考えるところでしょう。

「……………完全なもの……………決戦は文化祭前日……………その時に杉崎君も動く……………。杉崎君は《企業》を何とかしようとしている……………だったらどう動くか……………。……………あ！」

《企業》の考える、この場所についての考察は知っている。おそらくそれは杉崎君もだ。つまり杉崎君は……………。

「生徒全員にフィクションとして、この話を知らせようとしている……………」

そのために一巻から伏線らしきものを書いていたのなら納得がいく。

……………そうなれば、女神の動きも見えてくる。何たってあれは……………。

よし、方針が決まった。私がするべきことは……………。

「あ、もしもし藤堂先輩。ちょっと力を貸して欲しいんですが……………」

## 第11話 相対する水月鏡花

「と、いうわけでXデー……もとい文化祭前日がやって来ました」

「あなたは誰に向かって話しているんですの？」

「画面の向こうの皆様」

「？」

「いや、分からなければいいんです」

ただ今、生徒会の皆さんが杉崎君の要請で生徒全員を集めている最中です。

……すごいわよね、この碧陽学園のノリの良さ。こんな夜中に一声かけただけでちゃんと集まるんだもの。

「確かにあなたの言ったとおり、杉崎鍵は生徒を集めましたわね。

……いったいこれから何が起こるんですの？」

「杉崎君の演技をみんなで鑑賞するんですよ。そう言っていたでしょう？ 私はそれをちよつとばかり盛り上げるだけです」

「……まあ、納得しておきますわ」

「と、話はここまでみたいね」

体育館のステージに黙って集合の指示があったけど、私がこれからすることを考えるとそれでは都合が悪い。

「というわけで、名前お借りしますね、藤堂先輩」

「その代わり、後で洗いざらい吐いてもらいますわよ」

そんな藤堂先輩の言葉を聞きながら、私はこの前の電話での会話を思い出していた。

「あ、藤堂先輩。電話では初めまして」

「ああ、水月さんではありませんの。どうかしましたの?」

「はい。実は藤堂先輩にお願いがありました」

「……お願い?何ですか?この藤堂リリシアできる限りの力になりますしょう」

藤堂先輩とはこの前の取材のあと、新聞を読ませてもらったのだが、それが学生新聞とは思えない出来だったので素直にそう褒めたらとても嬉しかったようで、それ以来仲良くやっていた。

「今度……文化祭の前日なんですけど、そこで杉崎君がみんなを集めて何かを行います。その時に私もちよっとした余興をしたいと思うんですよ。で、藤堂財閥の名前を貸してもらいたいなと」

「藤堂財閥の……?」

「はい。まあ、箔付けたいんですよ」

「それはどうしても必要なものなんですか?」

「無理ならほかの物を考えますよ?」

「……いいでしょう。ただし、くれぐれも財閥の看板に泥を塗らないようにお願いしますわ」

「詳しい話は聞かなくてもいいんですか?」

「あなたのことですから『当日のお楽しみです』とか言つつもりだったのでしょうか?」

「……よくお分かりで」

「まあ、あなたの秘密主義は今に始まったことじゃありませんものね。その代わり、終わったたらちゃんと話してもらいますわよ」

「ありがとー、リリシア。あいしてるー!」

「んな!？」

「明日から準備期間でしたね、お互い頑張りましょうね。ではでは」

これで何とかなつたわ。後は正門近くで待機している深螺とアリスが上手くやれば大丈夫……のはず。

細工は流々仕上げを御覧じろ、ってね。

さあ、最終決戦といきましょうか。

「ふざけんな。ここはそんなくだらない場所じゃない。ここはこの碧陽学園はっ 俺のハーレムだっ！」

(私を除いた) 全校生徒をバックに背を広げ、満面の笑顔で堂々と言い切った杉崎君。

さて、次は私の番ね。

…… 始まった。

「……ふふふ」

「何かおかしかったか？ 枯野」

「ようやくだ、ようやくこのときが来た。」

「……何を言っているんだ？」

「皆殺しだ……。全て滅ぼしてくれろ！」

そう叫ぶとともに、枯野 という名前らしいおじさんからは無数の影が湧き上がった。何というラスボス仕様。雑魚無限生産とか。超展開 k t k r。…… っ言っている場合じゃないわね。

「おお！ 何だこれ！ かけー！」 と言っている深夏らしき声が聞こえたような気がするがスルーして。

小道具を確認してっつと。

「深螺、アリス。避難誘導頼んだわよ」

こちらも対抗し、武器を構えたまま一気に突撃！

「分かる人だけ分かればいいシリーズ。ガードスキル、エターナルセイバー！」

全力を込めた刺突だったが、キン、と金属音をたてて弾かれる。予想通りだからいいけど。

「や、杉崎君。名演技だったよ」

「き、鏡花？その姿は……？」

杉崎君がビククリして尋ねてきた。当然よね、乱入自体もよく分からないし、何より私の背中から羽が生えているのだから………小道具、もとい霊体物質化能力、万歳。

あ、あと一つ訂正しておかないと。

「私は水月鏡花などという名前ではない！」

「はい？」

「天知る、地知る、我知る、子知る！悪の蓮華の咲くところ、正義の姿あり！かよわき華を護るため、仮面 イダーホタル、ただ今参上！」

「え、鏡花だよな？」

「……このパピヨンマスクには認識阻害の効果があるはずなのだけど……」

「そ、そうなんだ……。ってそんな 場合じゃなくて！何がいったいどうなってるんだ！？」

「説明は後回しでいいかしら？まずはあれをどうにかしないと」

そう言って未だに影を噴出しているおじさんの方を見る。

「さて、そろそろ解決編へと進みましょうか、女神様？」  
「ほう、では答え合わせをしようか」

中年のおじさんの声で話す女神。……正直違和感がある。

「私はあなたの正体について見当がついている。あなた、この『神の視聴区域』と呼ばれる空間そのもの、よね？」

つまりはこういうことだ。

「あなたは何者かによって意思を与えられた碧陽学園。まあ、謂わば……擬人化？はちよつと違うけど、だいたいそんな感じよね？」

「あの一、鏡花さん？」

「そして、この場所も元来特殊な場所で 『碧』に『陽』だから古代エジプトの流れを汲んでいるのかしらね 大願成就のご利益があることで地元民に知られていた。それを女神あなたという存在を作ることにより、対象が明確化し、この霊地の力が強化される。……長々と失礼しました。ですがこれで合ってますよね？」

「無視しないでくれるかな!？」

「何？杉崎君。今はスーパー鏡花タイム、略してSKTの最中よ？」  
「許せる!ってだからネタに走るのは止めてくれませんかねえ！」  
「ごめんね、でもあと少しだけ説明を。あなたは『そこにいる』と思われることで存在を確かなものにする。だから存在をアピールするために生徒たちの噂話を具現化していった」

一息つき、残りを一気に言い切る。

「今日ここで杉崎君が全校生徒を演劇の練習で集めることを知ったあなたは、自らの存在をより強化するべく介入した。演劇のなかにも『存在さえすれば』その劇の舞台を世界中にしまえばいい

ものね」

「ふむ、正解だな。しかしそれを理解した所で私に勝つことができるかな？当然聴衆は正義が勝つことを望むだろうが、地力を覆すほどの力はないだろう」

「そうでしょうね。でも私たちの勝率が一番高いことは確かよ」

「まあ、確かにな。……生徒の避難は終わったようだな。私としても想像する者がいなくなることはさげたいからな」

「その余裕をすぐになくしてあげるから覚悟なさい」

「やれるものならやってみるがいいさ。私も、全力を持って挑もう」

そう言った途端私と杉崎君を囲うようにいた影たちは一点に集まり……枯野さんを飲み込んだ。

そしてその姿を徐々に変えていき……

青みがかった黒髪の、どことなく杉崎君に似た青年が姿を現した。

……どこかで見た気がしたので、今まで散々放置していた杉崎君に聞いてみる。

「あれ、何か見覚えはないかしら？」

「ああ、確かにどこかで見たような……」

聞いておいてなんだが、よく杉崎君は答えられたと思う。

こんな超常現象を目の当たりにして会話ができるのは大したものだ。

そんなことを警戒しつつも考えていたら、やつはこう言った。

「我は、エコー・オブ・デス残響死滅。最初に人類を超えるものだ」

……………え？



## 第12話 決着する水月鏡花 + 1

「おお！残響死滅だ。エコー・オブ・デス やべえぞ、こつから鍵とのガチバトルか!？」  
「違うよお姉ちゃん！これから杉崎先輩との濃厚なシーンだよ！」  
「いやバトルだね！」

……外野からなにやら聞こえているが軽くスル しておこう。  
というか避難した後だから校舎の外にいるはずなんだけどなー、  
不思議だ。

「ま、そんなこと考える暇があったらまずは目の前の現実に対処しなくちゃね」

「そ、そうだぞ鏡花！なんだってあんなものが！」

「実はかくかくしかじかで」

「それで伝わったら逆にびっくりですよ!？」

「……ああ、これじゃ通じないのね」

碧陽学園お得意のノリとテンションで何とかなるかと思ったのに。

「作戦会議はそろそろ止めてもらおうか。我とて暇ではないのだ」

「もう少し待ってなさいよ。短気な男はモテないわよ」

「これは手厳しい。だがあまり時間をかけたくないのにな」

……具体的な対策浮かばず。出たところ勝負、か。

「ま、やりましようか。行くよ杉崎君！」

「お、おう！ってだから状況説明を！」

まずやるべきは彼の名前にもなっている「残響死滅」の能力を把

握……出来ればいいのだけど。

「取りあえず、先手必勝！」

小細工なしに最速の右ストレート。

「笑わせるな。この程度、羽虫にも劣るわ！」

「……効くとは思ってなかったけど、まさか防御すらされないとは。なんとというチート」

「俺としてはまず鏡花のスピードに突っ込みを入れたいんですけどねえ！」

「そこはほらあれよ。人体の神秘？」

「神秘なんかで目にもとまらぬ速さで動かれてたまりますか！」

「話している余裕が貴公らにあるのか？」

声とともに飛んでくる幾千もの……槍！？

杉崎君を抱えてその場から飛び退く。

「……普通逆だよ……」とか聞こえたのもスルースルー。

その後も続く攻撃、攻撃、攻撃。クロスレンジ近接戦闘に持ち込むことすらできない。

「ええい。ちょこまかと！いい加減当たったらどうだ！」

「いやよ。一発でも当たったらどうなるか分かったもんじゃ無いもの」

……というか全弾自機狙いの攻撃って避けやすいのよねー。……如何せん攻撃手段がありませんから膠着状態ですが。

「おのれ、ならば我が能力を喰らうがよい！」

……ふう、やっと能力引き出した。杉崎君ずっとお姫様だった  
るのもいい加減飽きてきたわよ。  
で、一言言いたいのよ。

「時間かけたたくない言いながら出し惜しみって」  
「喧しいっ！……はぁ！」

掛け声とともに現れる、死体の山。ここまでは記述にあったから  
予想通りっつと。

あ、杉崎君にはさつき私が触ってる限り大丈夫な仕様にしておき  
ました。

……要するに私が耐えられなかったら共倒れってことなんですけ  
ど。

しばらく様子を見て………何も起こらない？

「ば、バカな！？何故我が必滅の『残響死滅』が効かぬのだ！？」

動揺してるってことはすでに何かが起こっている？

「杉崎君、何か感じる？」

「………」  
「杉崎君？」

死体の山見て気を失った？十分にありえるわね。

「………に………い………」

「え、何？」

「し………に………た、い」

「！？」

その後も「死にたい」と壊れたラジオのように呟く杉崎君。

……冗談じゃない、何だってこんな言葉を聞かなきゃならないんだ。

そんなの、僕は許さない。

「……………」

考える。奴の能力がなんであるかを。

冷静に、冷徹に。

これと似たような現象を僕は知っていた。

あれはたしか楔とかいう深羅が使役していた霊体が憑依した時だったか。

つまり、奴、残響死滅の能力は。

「……………相手に『死』を思わせる。『死を思え（メモント・モリ）』か」

「!?!?」

「お前の能力、つまりはそういうことだろ？」

細かいことは分からないが名前から察するに「何者かが死の際に発する何らかの力 死の残響」に方向性を持たせ、対象にもたらず。おそらくこれで間違っていないだろう。

「能力の詳細が分かったところで効かぬ理由にはならぬだろ！なぜ貴様には効かぬのだ!?!?」

随分と口調が汚くなってるな。余裕が無くなってきているのか？

「簡単な話さ。僕はずっとこれよりも強い『死への衝動』に晒されていた、ただそれだけさ」

「な、何だと……」

「ま、そういうことだからさ、この私を死に至らしめたいのなら大きく息を吸い、愕然とした表情の残響死滅の顔を殴り飛ばす。

「その三倍はもってこい、ってね」

「ガハア！」

まずは一発。続けて追い討ちを……。

「かけたかった、なあ」

もう立ちあがっちゃったわね。

「」

しかも物騒にも暴走つきで。

ってこの範囲での能力発動はまずいから！

「……………っ」

さ、さすがに学園からもれないようにするのは辛いわね。防ぐことはできても動くことが出来なくなってしまった。

「……………冷静に分析しているほどの余裕ないわよねー」

何か他の手立てを……。

その時杉崎君の姿が目に入る。

あ、確か。

杉崎君は全校生徒を集めるために「俺主演の劇の練習やるぜ！」

って言ったのよね……。  
そうだ、大事なことを忘れていた。

この物語の本来の主人公は私、水月鏡花ではなく杉崎鍵であるという  
ことを。

私は……この世界において異物であるということ。

……感傷にひたっている場合ではない。せつかく逆転の手立てが  
見つかったんだから利用しないではない。

「杉崎君！」

「……きょう、か？」

「何ポケットしてるの！」

「……でも、俺には何もできないし……」

……気持ちは分かるのよ、気持ちは。慣れてなければこれ（・・）  
は例え私が影響を減らしても辛いだろうし。  
でも、まあ。

「らしくないわね、杉崎君」

「何を言ってる……」

「勝算なんてなくても守るもののためには身を賭して戦う。あなた  
はこれをギャルゲの主人公に学ばなかったの？」

「！？……そうだ、そうだよな。それに俺は場の雰囲気吞まれて  
出来ることを考えることすらしていなかった……」

そう言い何かを考える杉崎君。

……こうしてる間にも私の霊力は目減りしているのだけど、待ちましようか。

恐らく彼の脳裏に浮かんでいるのは碧陽学園のみんなの笑顔であろうから。

「……鏡花、俺に出来ることはないか？」

「男の顔ね、杉崎君」

その時の杉崎君は、決意を固めた、そう、本当にゲームの主人公のような顔つきをしていた。

「あなたがすることは単純明快。あなたが守りたいものを信じ、あれに殴り掛かる。ただそれだけよ」

「……分かった」

「……状況もわかってないわよね？そんな簡単に信じてもいいの？」

「当たり前だろ。鏡花だってこの学園の生徒でクラスメイトで、何より俺の友達だ。守りたいと思うし、信じるのは当然だろ？」

「私はアレと同等の化け物よ？」

こう言いながらも、私には次に杉崎君が言うであろうセリフが予想できていた。

「例えそうだとしてもそんなことは関係ない！ここにいるのは水月鏡花という一人の女の子だということを俺は知っている！それだけで十分だ！」

……ああ本当に。予想通りのことを言っちゃって。

「今のは格好よかったわよ。惚れちゃいそう」

「……へ？」

「ほら、ポケツとしてないでさつさとケリつけてきなさい、主人公」  
「お、おう！」

そう言い未だ暴走を続ける残響死滅へと向かっていく杉崎君。その足取りに迷いはない。

……………こんなと気に言うことではないかもしれないけど。

「さっきのセリフ、性別の部分間違えてたわよ」

ま、そんな小事は置いておいて、杉崎君の貴重な戦闘シーンでも鑑賞しましょうか。

「うおおおおおー！」

「そもその前提として、敵役として残響死滅を女神が選択した以上、ここは『生徒会の一存 えくすとら 創作する生徒会』の影響を受けているはず。であるなら杉崎君には逃亡群鶏チキン・チキンの能力が備わっていないければおかしい」

ちょうどその時一際大きい、最早視認できるほどの濃密な『死』が杉崎君を襲う

……………が何事もなかったかのように杉崎君は前進を続けた。

「逃亡群鶏は本来なら『強い相手を前にすると逃げたくなる』という何の役にも立たないん能力だが、誰かを心の底から守りたいと思う つまりは能力すら御しえる意思を持つことでその効果は一変する」

続く二撃、三撃、その後無数に続く『死』の悉くを杉崎君は無視して進む。

「その能力とは『絶対死の回避』本来なら回避できない『死』そのものを避け得る、究極の能力と成り得る」

杉崎君は残響死滅まであと少しというところまで進んでいた。

「ここで問題になるのは『どの程度再現されるか　つまり杉崎君の信用問題』になるのだけど。ま、私が心配することでもなかったみたいね」

杉崎君は拳を大きく振りかぶって……。

「歯を食いしばれよ最強、俺の最弱は……ちつとばっか響くぞ！」

戦いは決着した。

「こんな時までネタに走らなくても……まあ、でもこれが碧陽学園の良さであり、強さなのかもね」

さて、あとは事後処理を残すのみ、か。

……………私がこの世界を去るまで、もう幾何の時も残されていない。

えびるーぐ？（前書き）

意外と時間が経ってしまいました。

今回は凄まじいご都合主義が含まれております。ご注意を。  
では、どごぞ。

えびろーぐ？

さて、これで一応決着がしたわけなのだけど……。

これから事情説明か、はあ。

取り敢えず学園の外で待機していた人たちを呼び戻すために深羅に連絡。

……あ、翼だしたままだった。あの状況で消さなかった私っていたい……。

「鏡花？俺も事態を理解できてないから説明を……って何で凹んでいるんだ？」

「いや、ちよつとね。無駄な力使っていたなー、と。……ま、そんなことはいいのよ。口裏合わせてね」

「いや口裏あわせは望むところだけれど。その前に説明を」  
「ちよつと杉崎！？生徒集めろって言ったり知らない人に校門前に待機してくださいって言われたり！どーということなのか説明してもらいましょうか！？」

会長および全生徒様ご一行とうちゃく。

「あ、会長。えーつとこれはですね」

「学園祭前日のちよつとした余興ですよ」

『余興？』

……杉崎君。口裏合わせてよ。そこで同じ疑問口にしちゃいけないでしょ。

そのことをツッコむわけにもいかず話をつづける。

「ええ。杉崎君がわざわざ『生徒会の』シリーズのブローグ、

エピソードでオリジナルストーリーの『企業編』やっていたのは知っていたわよね？……まあ、あれも劇の伏線だったのだけど」

……だ・か・ら・杉崎君。「え、なんでそこまで知ってるの？」  
みたいな視線を向けなくてよ気づかれるでしょうが。」

「このたび藤堂財閥の力を借りまして、映像化することにしました。これから本気で頑張ってるなんとかちゃんとしたものになりたいなー、と思っています」

ちなみに映像は<企業>が各所においていた隠しカメラの映像を  
使わせていただきました。深羅経由で鞠亜に頼みました、ハツキン  
グ。……犯罪だから良い子のみんなは真似しないように。」

「以上で説明終わりですが……何か質問ありますか？」

正直かなりツッコミ所満載の内容だったと思う。でもきつとこの  
学園のノリと今の状況なら……。

「すげー！ってことはあの黒い影とか全部本物ってことだよな！？」

「先端技術はあそこまで進んでいるのね！」

「かがくのちからってすげー」

よし、予想通りの反応。きつとネギ のような反応をしてくれる  
と信じていたわ！

……もちろんある程度巻き込んだ人たちは納得してないけど。

「じゃ、そういうことなんで。私が言うのも変ですが、皆さん、明  
日も大変ですけどがんばりましょうー！」

『おおー！ー！』

「では、解散！」

「あ、ちよ、えっと……。す、杉崎！あとでもう一回説明してもら  
うからね！」

ぞろぞろと帰っていく大多数と……。残った一部の人们たち。ちなみ  
に残ったのは杉崎君、藤堂先輩、深羅、アリス、それと……。

「さて、説明してもらおうか、後輩」

「……。ま、そうですね。先輩も残りますよね……。理事長は放っ  
ておいても大丈夫なんですか？」

「もちろん許可をもらって来たから大丈夫だ」

「そうですね。じゃあ」

ちゃんとした説明を、と続けようとしたところで着信音が。

「あ、これ私のですね、ちよっといいですか？」

「いいけどなんでSkyeの起動音なんだ……？」

許可をもらったので携帯を開く。そのディスプレイにはこう表示  
されていた。

神

……。ん？名前、神？もう一度画面を見てみる。

相変わらず画面には『神』の文字が。

もちろん私はアドレスに『神』などという名前で登録している人  
間はいない。

……。つまり、これは……。

おそろおそろ通話ボタンを押す。

「やほー、元気？」

「……………」

あまりにも予想通りの声でした。

「ちょっと！なにか言つてよ、ケイ！あ、今は鏡花か」

「状況を説明してくれないかしら？…………ユウ」

「！？」

驚いた顔のお三方。いや実際私もびつくりです。

「鏡花は今から帰る（・・・）つもりだよね？」

「ええ、そのつもりだけれど」

もちろんこの場合の「帰る」は家にはない。

「ちょ、ちょっと待て後輩」

「だから帰り方が知りたいのだけれど」

「未練はないの？」

言われ、少し考え…………、思考を止める。

「無いわね」

「鈴音さんには会わなくていいの？」

…………それを考えなくなかったから思考を止めたというのに。

「会いたいよねー、だって恋人だもんねー」

「…………今、すごく嫌な予感がしているのだけれど…………」

ユウのセリフが終わるや否や、私は校門の方から凄まじい怒気を感じている。

……ああ、つまりは。

「と、いうわけで神無鈴音さんのご登場です！」  
「やっぱりそういう展開ですか!？」

もはや見間違えようのない距離まで接近した人影が拳を振り上げ……ぽすっ、という音がした。

「……何か言うことはないの？」

その声は地獄の底から聞こえてくる怨嗟の声のようで、……初恋に胸を焦がす少女のようで。

その声だけで彼女がこれまでどんな思いでこの数年間を過ごして来たかが分かったような気がして。

「……ユウ、恨むよ」

「どうして」

「未練、出来ちゃったじゃない」

「そう。じゃ、そういうことで、じゃね」

通話が切れたことを示す電子音。私は改めて彼女……鈴音と対峙した。

「ただいま、でいいのかな？」

「……ケ、ケイ……。うん。お帰りなさい」

やれやれ、本当にどうなることやら。

それぞれのエピソード、そして……

〈紗鳥side〉

……。後輩は巫女娘を見て留まる決心をした、か。

後輩は、また消えるつもりで最初からここにいたのだろう。話さなくてもその位のことは理解しているつもりだ。それを改心してくれたのは嬉しいのだが……。

「私では一切、心が動かなかつたのにな」

正直、女として妬ける部分がある。あいつは、巫女娘の恋人であると理解していても、なお。

だが、これはある意味チャンスなのではないだろうか？

あの憎たらしい後輩を振り向かせることができるかもしれない。少なくともその時間は与えられた。

……。我ながら少女思考すぎるか？……。いや。どうやらプレゼントがあるらしいからな。少しくらい期待させてもらっぞ。

「おい後輩！ 巫女娘とイチャつく前にきちんと説明してもらっぞー！」

そう言った私の声は、ここ数年で最も明るいものだった。

〈ユウside〉

あ、そうそうさつき言い忘れたけど、碧陽学園、本当に神の視聴区域にするから。

鏡花にはその特派員みたいなことをしてもらっね。

うーん、メールの文面はこんな感じでいいかな？  
それにしてもケイには悪いことしたかな。完全に不意打ちしちゃったもんね。

……こうでもしないとケイってば意地っ張りだから絶対会おうとしなかっただろうしね。

本来ならこのまま「鈴音さんと先輩さんとお幸せに」というつもりだったんだけど……

想像以上にやっかいなことになっている。

「ごめん、ケイ。また仕事押し付けることになるかも……」

ま、落ち込む前にメールを送信っと。ふふ。困惑するケイの顔が目に見えかぶ

く????? slide

「あ、………が………が」

「ふむ、これもここまでか。だが、なかなかいいデータがとれたじゃないか」

私は回収した残骸      先ほどまで女神と呼ばれていたものに  
目を落とす。

「あれが物質化霊マテリアルゴーストの真祖、シキミケイか」

しかもその横にいるのがカンナの巫女に死者の王ときた。なかなか研究意欲をそそられる。

しかも極めつけは……。

「<鍵>を持つものか。素晴らしい!」

今回のことはちょっとした余興だったのだがな。とんだ拾い物をしたものだ。

「<鍵>自体、存在しないと思っていたのだがな。……あれさえあれば……」

我が悲願が成就する!!

「フッフ……アーツハツハツハツハ！」

えびろーぐ？（後書き）

いかがでしたでしょうか？

一応今回を以て第一章「女神編」ともいっべきものが終わりました。

……最後になんか余計なの出てきてますが、これからもこの作品は続いていきます。

そこで皆さんの意見を参考にしたいのですが。

今後の展開として、戦闘パートは

？マテゴ勢のみ

？生徒会勢も参戦

どちらがいいでしょうか？ちなみに杉崎はどちらにしてもある程度戦います。

要は「これから戦闘描写増えるけど、生徒会ヒロインズの出番増やしますか？」ってことです。ご意見お願いします。

最後にこんな駄文を読んでもいただき、ありがとうございます。

修学旅行する水月鏡花（前書き）

投稿遅れて本っ当に申し訳ございませんでした！！  
言い訳はしません、はい。

今回、分量少なくてごめんなさい。  
次からは頑張つて書いていきます。  
では、どうぞ。

## 修学旅行する水月鏡花

「ありのままに今起こったことを話すわ。さっきまで文化祭前日だったのにいつの間にか寝台列車に乗っていた。な、何を言っているのかわからないと思うけど、私も何が起こったかわからなかった……。頭がどうにかなりそうね……。催眠術とかご都合主義とかそんなものじゃ断じてない。もっと恐ろしいものの片鱗を味わったわ……」

「あの鏡花？何一人でぶつぶつ言っているんだ？」

「いや、状況説明は必要かな、と」

「？」

「あー、何でもないから無視してくれていいわよ、巡」

と、いうわけでただ今京都へ向かっております。話が飛んだのでこれまでの話をかるく話しておこうかと。

あの後鈴音に抱き疲れながらも私が幽霊だということは伏せて杉崎君、藤堂先輩に軽く説明して、その後鈴音と先輩にちゃんとした話をする。ごねる鈴音をなんとか宥めすかしお帰りいただき……の前に二人で文化祭回りましたが、何とかお帰りいただき。これが一番大変だった。その後またもや『神』からメールが来て、その内容は「日記みたいに毎日このアドレスにその日あった出来事を送ると、なんとそれが世界に繁栄されちゃいます！」みたいな内容だった。アドレス先が『ハーレムは幻想』だったことに軽くツッコミを入れつつそんなことをしておりました（まる）……長文失礼。

「……ちよつと大丈夫？具合が悪いなら先生に」

「いや、本当に大丈夫だからお気になさらずに」

ちなみに私がいるのは巡の下なのですが、なぜか地縛霊が住んでいたのでパンチから始まる交渉術でお話してご退場願いました。したら車掌さんに思いつきり感謝されました。……あれはなんだったのかしら？

しばらくしたら同じ班の面々　というよりは杉崎君が　全力  
でみんなを起こしにかかって何か話そうという流れに。

巡、守君、深夏、と順々に話していたところで

「この沈黙を破るのは鏡花、君の役目だ」

「……え？私？」

「実際鏡花の話は聞いてみたいしな。この流れで来ているんだ、多少はなんでもありだぞ？」

杉崎君の声に周りの人は賛同している。

「そんな聞いて面白い話なんて……あ」

「お、なんかあったか？」

いや、さすがにこれは……。

……でも偶には人に話してみるのもいいかもしれない。

「じゃあ、一人の少年の物語を話します」

一度大きく息を吸い、声を紡ぎ出す。

「これは一人の死にたがりの物語です」

「昔むかし、あるところに死にたがりの少年がいました。その少年は『死にたい』が口癖の、ただどけっして根暗なわけではない、そ

んな不思議な少年でした」

「その少年は様々な人と出会い、成長していきました」

……陽慈との出会いは黒歴史として葬るとして。

「まずその少年は二人の少女と出会います。その二人とはそれぞれ別の事件で出会うのですが、少年の人生に転機が訪れたのはこの二人との出会いがあったからでしょう」

「ある日、少年は交通事故にあってしまい、そのせいで不思議な力が目覚めてしまいます。『霊体物質化能力』と言われるその力のせいで、少年は次々と霊事件に巻き込まれていきます」

「その能力のおかげで出会いがあったのもまた事実です。少年はある幽霊少女と出会います。そして少年はその幽霊と恋に落ちてしまいます」

「しかし運命とは残酷なもので、少年は二人の愛を確認したすぐ後で、ナイフで刺されて死んでしまいます」

ここで耀の話は取り上げないようにしてっと。

「本来ならここでただの非劇として少年の人生は幕を閉じることでしよう。ですが、幸か不幸か少年の周りにはとても優秀な霊能力者がおり、また、少年自身の力 『霊体物質化能力』 を持っていたこともあり、少年は質量をもつ霊体、マテリアルゴーストとして生まれ変わることになりました」

あんまりこの話を詳しく話すとせっかく違和感をなくすような働きを『神』がしてくれたのを無駄にしかねないから自重するとして。

「その後紆余曲折を経まして少年は世界を救うことになります。…最愛の少女を犠牲にして」

と、当時は思っていたのだけどねえ。まさか普通に会話する日がくるとは。

「その後少年は自分以外のマテリアルゴーストを監視、判定し自らが関係した事件を清算し終え、この間に別の少女と愛し合ったのは脇に置いておくとしましていよいよこの世界を去る日がやってきました」

「自身が光となり消えていく感覚とともに意識が薄れていき……、目が覚めると初めに愛した少女の前に居ました」

……ここ、表現するの難しいわね。

「その少女はいわば『神の使い』といった状態になっていて、少年にまだやって欲しいことがあるというのです。……そして少年は言われるがまま、ある学園に通うことになります」

「!?」  
ああ、杉崎君がなにやら気づいたような顔をしているけど、取りあえずこの話を締めましょうか。

「そこで少年は生き別れた友人たちと再会し、自分には本来死者であるはずの自分には分不相応な幸せに戸惑いながらも日々を過ごしています」

さて、この場の流れに沿って最後はこの言葉で締めましょうか。

「というラノベを最近読んだのだけどどう思う?。」

ところがさっきまでの二人のように皆が騒ぎになることなく口々に「だよなあ」「でも鏡花の話し方に熱こもってたよね?」「それだけ思い入れがあるんだろ」「それにしてもおもしろかったー!」などと言っている。

失礼な、厳然たる事実であるのに。

「なあ、鏡花。面白い話ではあったんだが、この状態じゃみんな寝れねえか?」

「む、確かに。ピロートークとしては不向きだったわね」

「……鏡花までその嫌な言い方するんだな」

「まあ、安心なさい、深夏。すぐにこの熱も冷めるから」「ん?どういうことだ?」

さっきから色々考えている風な杉崎君を小突きに行く。

「ほら、杉崎君。次の人にまわすよ」

「あ、ああ。……次は……守か?」

瞬間静まり返る列車内。……相変わらず凄まじい連携よね。

「なんで急に皆冷めちゃってるの!?!」

「守の話なんて誰も期待出来ないからよ」

「淡々と返すなよ姉貴!……ああ分かったよ!こうなったら俺がとっておきの面白い話をしてやるぜ!」

『ZZZ』

「早くも心が折れそうだが、まあいい。今に見ているよ……」

こうして守君が話し始めたのは自身の夢が全て正夢になっている  
ということだった。

それでもってオチは車両の脱線事故、ということなのだけ……。  
うん、おかげで列車内はあっという間に阿鼻叫喚の地獄に変わった  
わね。……ま、一肌脱ぎますか。

「大丈夫よ、みんな」

『あん!?!』

「例え何があっても、私がいるから。ほら安心でしょう?」

『……………』

「……………」

『……………か、かつこいい……………』

「当然。なんていったって水月鏡花様ですから」

と、いうわけで。修学旅行、スタートです。

## 修学旅行する水月鏡花（後書き）

地味に一周年です。明らかに一年で書いたにしては少ないですが、はい。

結局、「カラオケする生徒会」の改訂がまだ出来ていません。もう少々お待ちください。

では、次回はもっと早く会えることを願って。

P.S.

一周年記念とかやった方が面白いんですかね？

**特別企画する水月鏡花（前書き）**

これだけのもの書くのにひと月もかけて申し訳ありませんでした！

今回はサブタイトルのとおりです。

では、どうぞ

## 特別企画する水月鏡花

「マテリアルゴーストは無事一周年を迎えました。みなさんこれからも応援よろしくお願いします！」

「……最初の一声は私のポジションなのに……」

桜野先輩が少しいじけているが仕方がない。だって今回は私しかやることを知らないわけだし。

「と、いうわけで一周年特別企画をすることになりました」

『と、特別企画だって（ですか）！？』

「特別企画と言ったらあれだよな？こっ、何とというかこっノクターンな感じのものをやるのか！？」

「ついにバトルロワイヤル編突入か……。武者震いが止まらないぜ……！」

「ようやくこの小説もムーンライトに進出するのですね……！」

「うん、いちいち突っ込むの面倒だからまとめて言わせてもらうね。てめえ等黙れ」

『……（鏡花、怖い）……』

「それで、結局いつたい何をするのかしら？」

一瞬凍ってしまった空気が知弦さんのおかげで動き出す。

軽く咳払いをし、今回の企画を発表する。

「今回は皆さんに、RPGをしてもらいます」

『RPG？』

「って何度かやってなかったか？」

「真冬もそう思います。確か、会長さんにゲームをやらせた回と夢の中での話しをしましたよね？」

あらかじめ予想された質問をする椎名姉妹。まあ、そんなだけ  
ど。

「それを大規模にした感じ……といったら伝わりやすいのかしら？」  
「つまり、人数をもっと増やして……まあ、劇みたいなのをやる、  
という認識でいいのか？」

「察しがいいわね、杉崎君、ご褒美に……」

「ご褒美に!？」

「この、スープレチャーハンの元をプレゼント!」

「……これは？」

「まあ、おいしいからとっておきなさいな」

無駄話はこれくらいにしまして。

「それでは今回のGMゲームマスターを紹介します!」

「あれ?てつきり鏡花がやるものだとおもってただけど？」

「誰がやるんだ？」

「それでは、どうぞ!」

「はい、GMのユウです!」

「……誰?」

「はい、ここで速攻魔法「ご都合主義」発動!これは特別企画なん  
だから細かいことは一切省略!」

「はい、分かりました!」

「……うん、毎度のことだけど」

「ご都合主義、なんと甘美な響きか。

「はい、ルール説明入りまーす」

「はい」

「……ユウ、さすがにこれはやりすぎじゃ?」

「いいのいいの! 特別企画だから!」

「今後全部それで言い逃れるつもりねっ!」

「……はい、ルール説明入りまーす」

「やり直したし」

「ぶっちゃけ言っちゃって、みなさんこのキャラはこういう感じだー、といったイメージをお持ちだと思っただけですよ」

「口調が童謡からか変なのは置いといて、まあ、確かにそうね」

「だからこそ、そのイメージで配役を決めても面白くないと思ったのです」

「ほむほむ」

「そこで私は乱数を利用して、完全ランダムな配役にしようと思っただけです!」

「おおー!」

『おおー!』

「……いつまでこの軽い洗脳状態は続くの?」

「そろそろ面倒だしもうあっちの世界送っちゃおっか。ポチツとな」  
「扱いが雑ね!」

「それでは気になる登場人物の紹介です!」

杉崎

会長

知弦さん

深夏

真冬ちゃん

鏡花

鈴音

深羅

アリス

リリシア

巡

守

中目黒

枯野

紗鳥

「と、こんな感じになってるよ！これらの方々はすでに仮想世界に送っちゃたよ」

「なるほど、こんな感じで……って、うん、ゴメン基準が分からない」

「えーっと、気まぐれ？」

「……ユウに理由を求めた私が馬鹿だった……」

「ちなみに『このキャラ出してくれ！』みたいな要望は募集中らしいよ？」

「この会話面倒だから先進めましょう」

「それではさっそく、今回における役どころを決めていくよ！」

「確か、乱数使ってランダムに決定だっけ？」

「そういうこと。ではさっそく、シャッフルスタート」

しばらくお待ちください

「はい、というわけで、結果出ました！……うわあ、これは面白そうだ」

「どうなったの？」

「10のようになりました、ジャンー！」

杉崎 魔法使い  
会長 アーチャー  
知弦さん ザコ  
深夏 遊び人  
真冬ちゃん 魔法使い  
鏡花 ボス  
鈴音 村人  
深羅 ザコ  
アリス ザコ  
リリシア ボス  
巡 ビーストテイマー  
守 ザコ  
中目黒 格闘家  
枯野 ザコ  
紗鳥 騎士

『ザコが強すぎるっ！』

全員で本気でツッコまざるをえない配役だった。  
それはもうすでにこの場にはいないはず人たちもツッコむレベル  
だった。

「これ明らかに意図的じゃない!？」  
「いや、これがほんとにランダムでやったんだよね」

作者注 本当に乱数使って某計算ソフトにやらせました。あま  
りにも無茶苦茶な配役で自分で大爆笑しましたし。

「ほら、作者だっってこう言ってるよ？」  
「この作品は一応私の一人称って設定なんですけどね!？」

さすがは特別企画。メタ発言全開だった。

「まあ、これの変更はするつもりないから。せっかくEx e1先生に決めてもらったんだし」

「……まあ、いいか」

特別企画だし。……これ、便利な言い訳だ。

「と、いうわけで、鏡花もレッツゴー！」

「……私はボス、かあ。ま、いつてきます」

と、いうわけで、特別企画、RPG編、スタートです。

……まあ、すごい軽いノリでやりそうですので、ふいんき（なぜか変換できない）を楽しんでくださいな。

## 特別企画する水月鏡花（後書き）

はい、次回は本当に早く書き上げます。

あ、でもそろそろ碧の軌跡の発売……いや、なんでもないです。

本文中でも述べましたが、他に「このキャラを特別企画に出して欲しい!」みたいなものがありましたら、言ってください。

他のキャラみたいに謎の配役振って登場させますから（笑）

では、今回はこの辺で。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2966n/>

---

マテリアルゴーストの一存

2011年9月18日19時33分発行